家庭雜誌

第五十六號

日用百科全書第二編發刊廣告

樞密院副議長從二位東久世通禧伯題字。貴族院議員從三位渡邊驥君題辭
御歌所參候從三位松浦詮伯序文。上杉義順君令夫人題歌

茶の湯と生花

全一册 美裝
紙數二百五十頁
正價金廿錢
郵稅六錢

挿畫 極彩色口繪…水野年方（寫眞）●式部長官從二位鍋島直大侯同夫人肖像●木版彫刻極密畫數十個（銅版）挿花●京美人の茶煎●山城宇治の茶摘●陸前松島●信州善光寺●東京不忍池の蓮花●相州箱根早雲寺の茶室●美人の茶の湯、

茶の湯、生花は日本特有の一技にして、國風の洒灑、清麗、氣韻沈正の態を見るに足り、苟くも中以上の士女は皆之を辨へざるを恥とす、茲に斯道の大家に請ふて、其技の初歩より奥秘に至る迄を、最平易明瞭に述べ、文の足らざる所は圖繪を以て之を補ひ、本書を讀む人をして又師に就くの煩なからしむ。紳士淑女の方々、居常禮法を治め、餘暇此二技に及ばゝ、家庭人品の高きと更に幾段ならん。

日用百科全書目次 自第一編至第十二編

◉第十三編以下の目次は追て廣告すべし

- 第一編 和洋禮式
- 第二編 茶の湯と生花
- 第三編 實用料理法
- 第四編 家政案内
- 第五編 衣服と流行
- 第六編 住居と園藝
- 第七編 實用音樂 附樂譜
- 第八編 手藝指南
- 第九編 内外遊戲
- 第十編 商業手引
- 第十一編 旅行案内
- 第十二編 通俗書簡文

日用百科全書正價●一册金二十錢●十二册前金二圓十五錢●郵稅一册に付六錢宛

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

平民叢書全部拾貳册

- 第一卷 十九世紀之大勢
- 第二卷 世界經濟上之變動
- 第三卷 國家と政府
- 第四卷 教育と遺傳
- 第五卷 文明之弊及其救治
- 第六卷 現時之社會主義
- 第七卷 經濟と道德
- 第八卷 歷史攻究法
- 第九卷 哲學變遷史
- 第十卷 白晳人種之前途
- 號外 銀貨之過去現在未來
- 號外 責任內閣

定價 一册拾貳錢號外一册拾錢郵稅各貳錢

全部取揃 御注文の節は拾貳册壹圓拾八錢郵稅拾八錢にて御注文に應ず

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

德富猪一郎著

再版 國民叢書第七册

第二 靜思餘錄

定價十錢 郵稅二錢

水磨を轉ずる勢力は寂寞幽靜の源泉より來る人生の大業焉ぞ微眇の奧底に潛まりたる心靈が靜思練想せられたるの餘、發越飛躍して此に到りたるものならざるを得んや。今や戰爭の影響は社會を鼓吹して事々物々暫迅飛動せんとす、是時に於て誰か社會に向て靜思の材料を供するものぞ。若し餘錄にして其萬一を值するに足らば則ち幸甚也。

- 五版 國民叢書 人物管見 定價拾五錢 郵稅二錢
- 六版 國民叢書 青年と教育 定價拾五錢 郵稅二錢
- 十一版 國民叢書 靜思餘錄 定價拾五錢 郵稅二錢
- 六版 國民叢書 文學斷片 定價拾五錢 郵稅四錢
- 四版 國民叢書 天然と人 定價二十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

新刊

青年叢書 第貳卷

遠征

定價拾貳錢　郵稅貳錢

世界的遠征は新紀元を開始するの第一歩なり、天命、自然、人力は其最大要素たるなり。『遠征』は國民的旅行の嚮導たらんとす。『美』の布哇は大日本國民の移住地たるに非ずや、我南隣のフヰリッピン群島は同胞古戰塲にして新市塲に非ずや

東洋の市塲と西歐列國との關係は如何に日本を壓しつゝある乎。世界近世の航路、運河は如何に商業上軍事上政略上至大の任務ある乎。

日本國民をして商業家として地學家として探撿家として軍事家として歷史家として世界旅行の征途に上らしめ戰勝國民の足跡、足塲世界に普からしめよとは『遠征』の聲なり。

白芙蓉の長影を北極に落さしめよ、大日本國民の健脚をして全地を蹂躙せしめよ。

青年叢書 第一卷

武備教育

定價拾貳錢　郵稅貳錢

◎順次出版の『青年叢書』目次は如左

◎第壹卷　武備教育
◎第二卷　遠征
◎第三卷　市民
◎第四卷　職業
◎第五卷　學校
◎第六卷　技術
◎第七卷　傳記
◎第八卷　時世
◎第九卷　實踐道德
◎第十卷　壯遊

發兌元　東京京橋區日吉町　民友社

明治廿八年六月廿五日發行

家庭雜誌第五拾六號

目錄

社説

科學

文藝

家政

史談

雜錄

時事一斑



家庭雜誌第五拾六號
（明治廿八年六月廿五日發兌）

社説

旅行



は憂いもの辛いものと歌ひたりしは、途上の危險ありし戰國の世若くは支那の如くに地廣く路惡しく行通不便なりし所にて口すさみなれしことにして、今は却て旅行は人生樂事の一たるのみならず最も有益なる快樂の一として數へらるゝに至れり。」

百聞一見に如かずとは、昔に於て金言なるが如く、如何なる時代に於ても依然として金言也。天地は活ける學校にして萬物は活ける敎科也。而して旅行は活ける敎育也。

歷史の學校は歷史の學生を容るゝに過ぎず、博物の學校は博物の學生を容るゝに過ぎず、文學哲學地理經濟政治宗敎の學校は文學哲學地理經濟政治宗敎それ〲の學生を容るゝに過ぎず。唯天地の學校に在ては文學者をも容れ、政治家をも容れ、宗敎家敎育家をも容れ、地理學者をも容れ、動植鑛物學化學哲學考古歷史の學者をも容れ、農人をも工人をも商人をも小供をも大人をも男子をも婦人をも容れ、夫妻をも容れ、兄弟をも容れ、朋友をも容れ、高尙なるものをも容れ、卑近なるものをも容る。即ちあらゆる學生として容れられさるものあることなし。加之斯くあらゆる學生を容れて、此のあらゆる學生に其欲する所に應して各自を滿足せしむへき敎授をなさゞることなき也。

文學者にして此の天地の學校に上り此の萬物の敎科を讀まば、到る所の山水風物人情風俗は汝の詩眼を射り

汝の詩思を躍らしむべし。歴史家にして此の天地の學校を廻り此の萬物の敎科を觀ば、到る所の山水風物人情風俗に刻まれたる千古の記臆は汝の史眼に映し汝の史思に浮ぶべし。商人は以て商業の新得意を求むへく、農人は以て農業の智識を聚むべく、工人は以て工業地を相すべく、政治家宗敎者敎育者は以て政治宗敎敎育の由て施さるへき所を考ふべし。

殊に夫妻にして相伴ひ去らん乎、啻に汝等の智見を開くへきのみならず、其樂みを同ふすることに由て其親愛を新たにすべく、其意念を高尙にすべく、其新協力と其新勤勉とを加ふべし。若し之に伴ふに其子女を以てし、其父たり其母たるものにして能く其去所に從ひて之が觀察すへき要點を示し、而して能く其觀察する所によりて之が疑義を解かは、豈啻に五月三月の學校敎育に敵するのみならんや。

暑熱は今や吾人に休息の時を踰り越せり。靑山綠水は新涼を扇いで人を迎へんとす。各種の學校は夏期休業の日來りて幾多の學生を樂しき故山に送ると共に、亦た其指す所に向て飛翔し去るに任せんとしつゝあり。紳士淑女は方に避暑旅行を用意しつゝあり。年々歲々函嶺大磯の海水浴温泉場に行き、一室に懶臥して九夏を消するは、天惠の休息時たる夏日を善用するものとは謂ふべからさる也。

避暑旅行は其費用の多からさると場所の好きとを擇びて、年々異りたる地方に向て去るを要す。或は北海道の一角に行きて一葦の水を隔てゝ西比利亞を望むべく、或は遠く浦鹽斯德を見るべく、上海に至るも可なるべし。殊に遼東朝鮮の新戰場を吊ふも興あるべし。而して近くは兩羽北越の海岸に嘯き、松島末の松山の風色を尋ね、或は木曾山、或は芳野山、或は神戸舞子の磯傳ひに去り、或は橋立宮島の眺望を擲するも面白かるべし。

要するに國家の膨脹と共に延長せしむへきは行樂の線路にして、是れ一方に於ては個人の上に收むへき快樂と利益との擴張なれども、他方に於ては更に國家の膨脹を來すへき異日の動機となるべき也。健全なる國民は健全なる快樂を取らさるへからず。而して健全なる快樂の一はたしかに旅行にあるを知らすや。

科學

軍艦の種類

國木田哲夫

酸氣を送る海風を自由に呼吸しつゝ、浪打つ磯邊に立つ二人あり。

右なるは水兵にして左なるは一少年なり。水兵の顔色銅の如く、筋肉の逞ましきを見れば、已に太平洋心の蒸溜水、三度も吞みたらんものと思はる。少年は思ふに未だ海事に暗き近時の小學生徒なるべし。

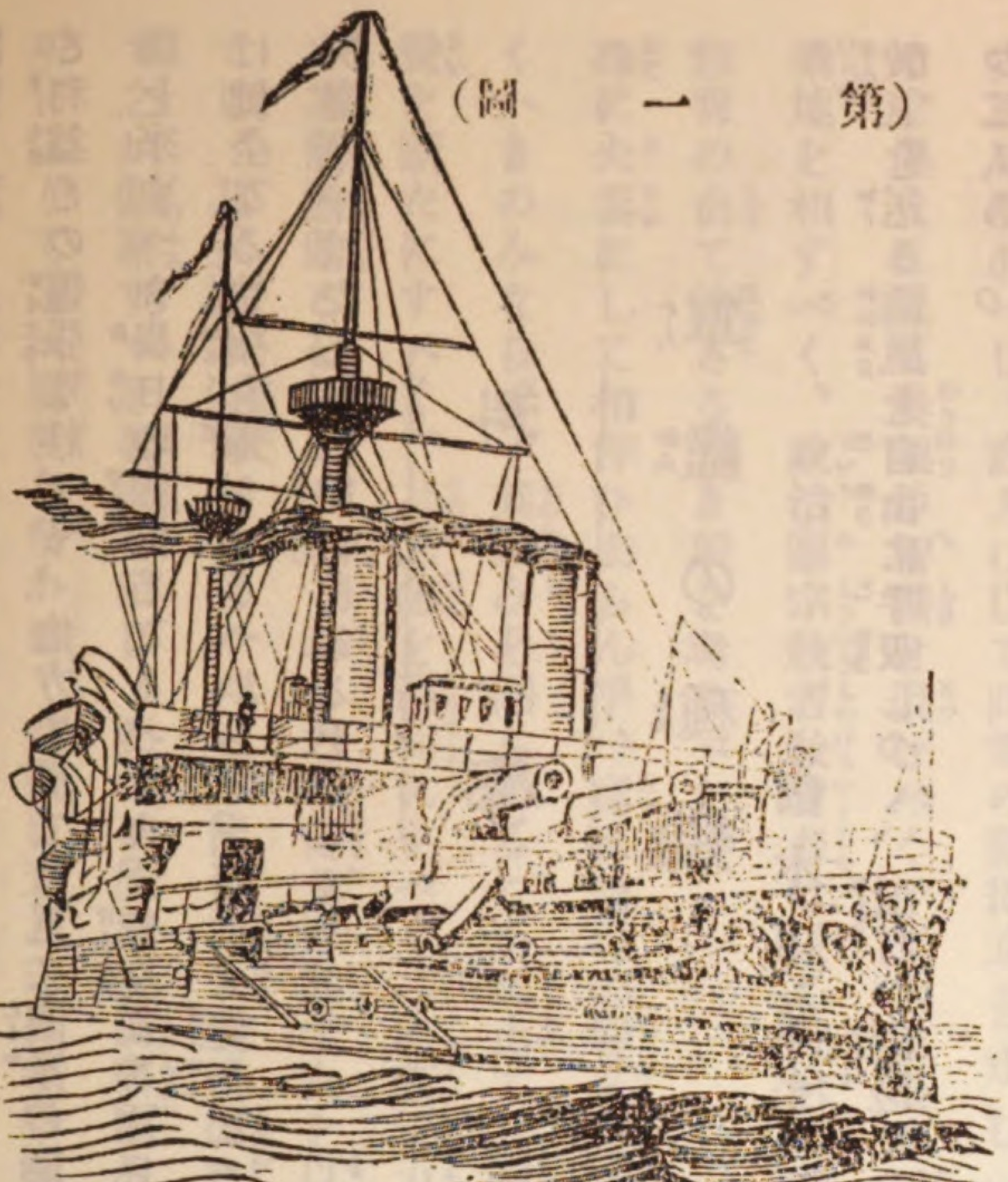
海に突出する岬角の端より、今しも現はれし二艘の滊船あり。一艘は軍艦にして、一艘は運送船なり。されど少年は此の區別を知らず。水兵に問ふて曰く、彼の滊船は二艘等しく軍艦なる乎と。水兵は大笑して少年の肩を輕く打ちぬ。曰く、否、否、前なるは軍艦にして後なるは運送船なりと。

少年曰く、何を以て之れを見わくるか、水兵は少しく首を傾けたり。暫くして答へて曰く、船の大小は以て此の二者を區別するに足らず、運送船なる和泉丸は四千噸にして黃海の役、大名を擧げたる軍艦赤城は六百噸餘に過ぎず。又た其の形と雖も、比叡、金剛、大島、盤城等の軍艦は、一見普通の帆船と異ならず、故に若し軍艦と商船との見わけを付けんと思はゞ先づ檣頭を見よ、

かく語りつゝあるうち、先きの二艘は間近き沖合に來

りぬ。

水兵指さして曰く、見よ、檣の頭を、前なる船の檣に



（第一圖）

は、細き長き絲の如きもの風に飄りつゝあるに非ずや。これをペンデントと稱し、商船には決して有せざるものなり。見よ、後の船は之れを有せざるに非ずやと。

かく語るうち、此軍艦と運送船とは、島の彼方にかくれて見へずなりぬ。

水兵はこれより、得意の辨を振ふて、縱橫に說き始めたり。少年は事々皆な小學校の先生すら知らざる事ゆゑ、大に興味を覺え、耳をすまして聽きぬ。

二人は草を敷て横になり、水兵はポケットより一冊の手帳を取出し、少年の眼前に差しつけ乍ら語る其の樣は、噛で含めるが如し、

＊　＊　＊　＊　＊　＊

軍艦にも色々の種類がある。其れは着物のうちにも羽織があり、シャツがあり、胴着がある如くである。

又た之れを譬へて言へば、陸軍の方でも、騎兵があり砲兵があり、歩兵がある樣なものである。

目的が違へば、其の目的を達するために用ゆる器械も自から違てくる。着物のうちにも、色々あるは其の爲である。陸軍にも色々あるは其のためである。軍艦に色々あるのも亦た、其のためである。

先づ軍艦の種類を言へば七種あるヂ―。

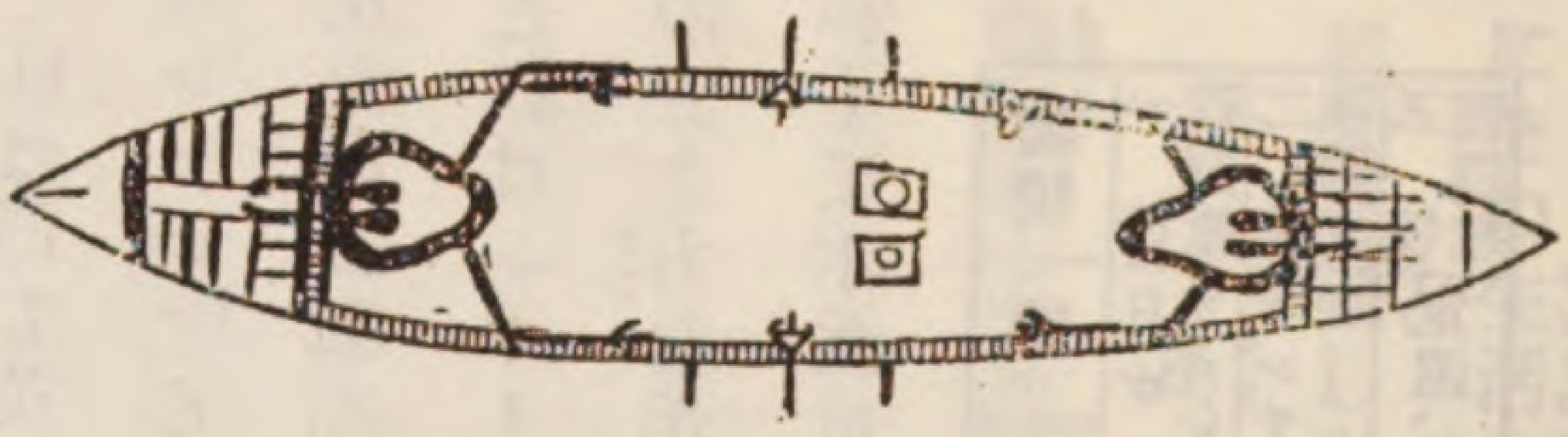
第一には戰鬪艦、第二には海岸使役艦、第三には巡洋艦、第四には報知艦、第五には砲艦、第六には水雷艇及び水雷砲艦、第七には練習艦。

多いだらう、處で之れには其れ〳〵の用向きがあるのだ。着物のうちには隨分伊達に作るものがあるが、軍艦は伊達には作らない。皆な各々確かなる目的があるのである。

先づ戰鬪艦の事から言ふよ、しかし細かい事は言ない、一々言たらきりがないからヂ―、分らない處があつたら手紙で聞き給へ。

戰鬪艦、讀んで字の如しだ。つまり軍艦の中での軍艦は此戰鬪艦だ。

其の構造上の特別の點を言へば、攻擊する力と防禦する力とを十分兼て居ることである。だから、能く敵の船を打ち沈め砲臺を打碎はすだけの大砲の用意と、敵から打た彈丸が容易に突き貫くことの出來ない程の鎧鈑の用意とが十分完全して居るのが戰鬪艦だ。



(第二圖)

已に構造の上の特點が分れば、隨て其の目的も推察することが出來るだらう。

堂々正々、天下分け目の戰爭を海上に試むるのは乃ち此戰鬪艦の役だ。敵の艦隊わが沿岸に向て押寄せて來た時、之れを防で追ひ散らすのも戰鬪艦の重任だ。又た今度は吾れから敵の砲臺間近く押寄せて、彼れが

打出す二十一珊の彈丸をも物ともせずして、ドシ／＼攻撃するのも戰闘艦の大役だ。

だから又た別に二つの性質が戰闘艦には必要だネー。即ち凌波性と遠航性とである。

戰闘艦が怒濤に碎易する様では困る。又た十分遠方に出掛けて行く事の出來る丈けの石炭搭載力が必要である。凡てこれ等は搆造上の特質である。

そこで戰闘艦は自然重困しい船となる。鎧板のみで船全躰の重量の三分の一ばかりを占めて居るから、船が重くなる道理だ。其の上、大砲は大きな者計りを載する。

其の結果は何であるか。即ち速力の減少である。重いものが速く走れる筈がない。だから戰闘艦は巡洋艦、報知艦などに比らべて、速力の點はズット少ないのが特質の一つだと憶へて居給へ。

戰闘艦に一等、二等、三等の區別がある、しかし之れは其の大小、精粗の別より來たもので、敢て性質の上に相違が有るのではないのだ。

此時水兵は第一圖と等しき書を示して曰く、

これは即ち英國の第一等戰闘艦の一ッの「ローヤルサバレーン」といふ船である。

又た第二圖と等しき圖を示して曰く、

これは『ローヤルサバレーン』を眞上から見て、大砲の置き方を示したものである。

かくて水兵は手帳のうちより左の表を少年に示しぬ。

艦種	艦名	排水量	裝甲	武裝	速力
一等戰闘艦	ローヤルサバレーン	一四、二六〇	一八吋	六十七噸砲四門十五珊速射砲十門其他	一八、ノット
二等戰闘艦	センチュリオン	一〇、五〇〇	一二吋	二十九噸砲四門、十二珊速射砲十門其他	一八、五一ノット
三等戰闘艦	定遠、鎭遠	七、四三〇	一四吋	三十珊半四門、十五珊二門其他	一四、五ノット

水兵は一々指ざして曰く、

見給へ、今日英國の東洋艦隊の旗艦『センチュリオン』は二等戰闘艦である例の定遠鎭遠の様な者は、第三等

だ。たッた第三等だよ。

蝙蝠の話

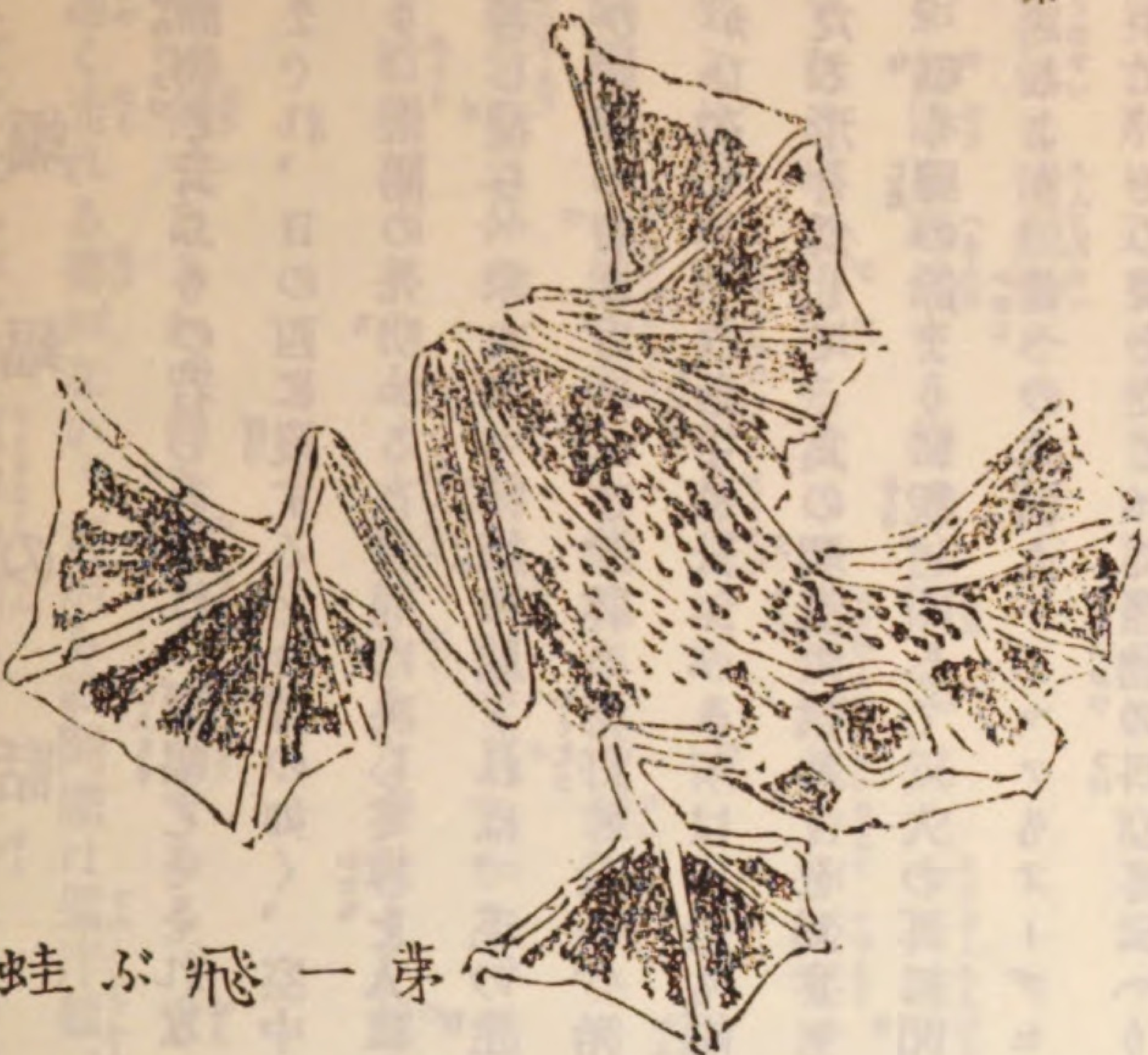
世に怪動物と云ふもの若しあらば、蝙蝠こそそれならめ。夕まぐれ、日の西に沒するを合圖の如く、空中を走せ廻り、太陽の光明かるき晝間は決して容を人に見せず、若し捕らへ來たりて精細に驗すれば、毛の生へ樣と云ひ、耳の着き方と云ひ、躰の格好と云ひ、殆ど鼠にまがひなく、その兩手と云ふべき所は、恰も蝙蝠傘に似たる形を爲して、鳥の羽翼の代わりを爲すものを備ふ。鳴く聲の餘まりに鋭どくして、人の耳に聞きも慣れざるより、昔への大詩人ホーマアもオーデセー詩巻の中に、その聲をたとへて怪物の叫びと云へり。近時の大詩人ポープも同じく怪物の聲にたとへたり。若しこの獸が嘗てあらざりし地に、不意に一匹を生じたらんには、その土地の人々は、それ妖怪よ怪獸よとさぞかし騒ぎ立つべきに、ありふれたるとて、我々の目にはめづらしくも見へざるなり、されども細かにその生活の有樣に付き一々穿鑿せんに、そを明らかに知り盡したる人幾人かある。

鳥か　獸か

鼹鼠と云ふ獸は、常に土中に住ひて、地上の人に顔を見せず、其形の鼠に稍や近かきは、恰も蝙蝠の從屬と同じく人に見らるゝとなし、且つその形の何づれも鼠に相似たるより云ふときは、鼹鼠と蝙蝠は從兄弟と云ふもさしつかへなきに似たれども、鼹鼠は明らかに獨の仲間に屬し、蝙蝠は屬する所を明かにせざるぞ、不思議なれ。さればアリストートルの時代には、蝙蝠は飛ぶ動物故、鳥の仲間なりと云ひたりしもの、中世マグナスの時代に至りては、その冬籠を爲すの點よりして、之れを獸類の仲間に入れけり。其後種々なる學者

種々なる研究の上より、或は鳥と云ひ、或は獸と云ひて、蝙蝠は殆ど何れの類にも歸すべき所なく、中にぶ

第一圖



第一　飛ぶ蛙

らりの姿なりしが、千六百二十年に至り、レーと云へる學者が四足獸の仲間に入れ加へたるより、この方、漸やくにその仲間に長く止まるの榮を得たり。

人の説は何づれにもせよ、我等をして少しくその實際を觀察せしめよ。先づその躰の形より驗せんに、四躰柔軟なる毛を以て覆われ、圓ろき小さき目は不釣合なる大なる耳と共に、小さき頭の兩側に備わり、非常に長き二本の手と、短かき二本の足は、跛の如くにふぞろいに、恰かもその手と足とは一枚張りの蝙蝠傘の如く、薄きゴムの如き水搔樣のものを備ふ。其の尾と云ふも、全じく薄皮にて張りつめられたるが、之れは飛ぶに際して舵の用を爲す。休むときは、その二本の手を上に引きかけて、躰を下にたれて、小供が學校の運動塲にて鞦韆に上りたるが如き形を爲せるが、這初むる時は、家鴨の歩むが如く不格好に又た混雜せる歩み振りを爲し、一度び飛び初むるや、昔の公家か大名が、長袖を翻がへすが如く、ひろ〳〵と靜かに、且つ温だやか也。食物は主もに虫類を好めるが、その胃袋は他

の獸類の如く、圓くして且つ短かし。牝には二個の乳袋を有し、其の樣、殆ど猿か人類の乳の如し。

ダルヴン氏と名聲を共にせるワーレース氏、嘗てマレー半島を旅行しけるが、ボルテオと云ふ所に達せし時不思議なるものを見たり。そは躰は蛙の如くにして、足に大なる蹼あり、木より飛び下ると、恰も人が傘をさして高所より下るゝか如く、ふら／＼として躰の重きを感ぜざるものゝ如し。蝙蝠の足にも全じく蹼はあれども、之れは彼れとは又た異なれり。蝙蝠はその不用の時に方りては、蹼を全くたゝみて、骨計りの如くなり、母指を以て木の枝等に下り、やすけく睡むる也。されば冬籠りの時近づくに至れば、蝙蝠は羣を爲して、木の洞古家の隅、又は岩屈の中に集まり、各々爪を掛け頭を低れて、冬日を過す也。此の間の働はたゞ躰中の血液の巡環するの外、物も食せず、身をも動かさず、殆ど死せると同全也。

蝙蝠の種類

蝙蝠の種類はたしかならねど、世界をこぞれば少くなくとも三百二十種はあるべしとなり。その繁殖の數は極めて少くなく、一度に一疋乃至二疋を產の、毛もなく、羽もなき、裸なる產子は、盲目ながらも母を知りその胸部に付きて乳を飲む樣、殆ど人の子と異なるとなし。

第二圖



第二 大耳蝙蝠

第三圖



第三 大鼻蝙蝠

多くの種類の中には種々樣々にして、或は耳の大なるもの、或は鼻の大なるもの、狐に似たるもの、鼠に似たるものあり。第二圖は耳の大なる蝙蝠にして、三圖は鼻の大なる圖を示めせり。第四圖は飛狐と名つけら

れたる蝙蝠にして、オーストラリヤ、及び東半球の熱帶の部分に產す。我が國にも、昔は大なる蝙蝠ありて、その大さは小兒の如しとは、兼ねて聞きほたゝたる所なるが、現に北海道等には、その遺種物今日に殘れるあり、先年北海道檜山郡に遊びし人は、同地にて捕獲せしものなりとて、生れ落ちたる小兒の手位もある大さなる蝙蝠の手を取り來りしが、こは同地にて夜中時々聲を聞く蝙蝠にして、名をドヘホと呼ぶものゝ手なりとて、現に記者はその手を保存せり。



第四圖

蝙蝠の種別

蝙蝠の種類は多く鼻によりて別たれたるが、二つの大別を更らに又た二三に別たれたり。その名を一々記載せんもうるさきに似たれば、玆にはたゞその中の一二に付き記する所あらんとす。南亞米利加に產する一種の蝙蝠ありバンパイヤーと云ふ。生き血を好むによりて類を別にせり。ダルヴヰン氏嘗つてチリの或る所にて野宿しけるに、一夜馬の非常に騷ぎ暴るゝに遇へり。種々介抱すれども中々に治まらず。かゝる中に其の下僕が、ふと手を馬の竪髮に觸れたるに例のボンバイヤーあり、堅く嚙み付きて離れず、漸やくにして取り去りたるが、翌朝に至たりて見しに馬の咬まれたる所は、皮焮衝して、甚だいたく〳〵しかりしが、二三日にして自然に醫したりと云ふ。

種々なる種類の中最も慣れ易きは、耳の大なる種類なり、室内に放つて自由ならしむれば遂には人の手より餌を取り、或は人の呼び聲に應じて、一二三等の字牌を過ちなく取るに至るものあり。

夏は虫の多くして蝙蝠のために、最も住み安き時なり今や夏の夕まぐれ後園に遊び給ふ時、その一匹を得給へば親しく研究するに面白からん。

文　藝

おさな兒と動物園

おむろ

此子はまあ如何して斯可愛らしいのでせうね？　日にやけて色は少し黒いが、其代り丈夫々々として居ますよ、其に頬などのぼちや／＼として居て愛くるしいこと、とんとお人形の様ですよ、私は如何樣嫌な心持の時でも、此子の莞爾々々と笑ふ貌を見るともう何も蚊も忘れてしまひますよ。斯いふ可愛らしい子を寵愛する父母は、如何樣に嬉しいことでござんせう、まだ舌は廻らないのですがね、其で日本萬々歳などゝいふのですもの。可愛からうでは有ませんか

一日此子を伴て動物園に往て見ました、草履を穿せた所が、如何しても車に乘らうと言はないのですよ、其をやつと車に乘たら、あばれて足をばたばたとやつたり、ふんぞり返つて降やうとするのですよ、實に困りました、其でもやつと抱へて、種々とすかして居る中、眞成にたわいのないものでもう睡りかけますの。睡てから重くなりましたこと、其に頭を車の横木へ打附ない樣にと思つて、注意して抱へて居たらくたびれましたこと、動物園へ着た時搖り起したら、ねむさうに目を細々と開て、直泣かけるのをだましすかす中、四下の様子の物珍らしさに、やうやうだまされて泣や

みました

象を見せた時には、唯偏な貌をして見て居ました。是がせめて五六歳になつて居れば、之はれ象で、彼は鹿でと説明も出來るが、何を言ても一年幾ヶ月といふ頑是なしですから、迚も分りはしません、駱駝を見せても唯偏な貌をして居た計でした。でもおん馬、おん馬、妙なお馬だね、と言つた時に、やう〳〵面白さうに、自分でもおん馬〳〵なぞと言ひながら手をさし出しました、とんと觸て見やうとでも思ふ歟の如く、

其より可笑かつたのは虎を見せた時でした、恰度誰歟が悪戯をしたので、虎があの聲で一聲たけりましたが、私に身を寄て退歩しました、吃驚して。で私が猫〳〵猫々大きな猫々だね、猫々やと言て御覧、と言つたら、其であの虎を猫々と思ひ、足下の小砂利を兩手ですくッて、にやあ〳〵やにやあ〳〵や、と言ひながら其小砂利をやらうとしました、小砂利を何と思つて居るのでせう、然し其中に自から、物を愛する心が現はれて居るのは、面白いでは有ません歟

此時後でぎやあ〳〵と家鴨が鳴始たが、忽ち其聲を耳に聞附て、とつと〳〵と言ひながら、ちよこちよこちよこ〳〵とかけて往ます。鶴や、駝鳥の様な大きなのを見て、如何様に喜びましたらう熊や、羊や、山羊を見ても、其が此子の近附でもないものですから、別に何の感も起さなかッたが、鎖に繋れて有た犬を見た時は、忽ち自分の友達でも見附た様に、わん〳〵わん〳〵と言ひながら驅寄て、頭を撫たり、尾を引ぱつたり、いろ〳〵に馴睦むのですよ、如何様に面白うございましたらう

其外馬が此子の心には面白かッた様でした、何しろ平常見附て居るものゝ事ですから。

凡そ三時間計此處に遊んで居ましたが、どうしても歸らうと言はないのですよ、餘程面白かッたものと見え

て、實に動物園はおさな子の爲めには好遊場です。

比喩談

湘川漁夫

物好の猫

解し難き事々を、强ひて探らんと試むる世の人々は、此猫今暫く耳を傾けて、余が語る猫の話をきくべし、

或る時、主人の鏡の前を行き過ぎんとし、風と一疋の猫を認め、直ちに飛び附かんと進み寄りしに、忽ち其形を見失ひ、潜かに後に廻りて、忍びやかに窺ひたれど、尙見當らず、それより色々と工風を凝らせど、好き思案も出でず、因りて首を延ばして、鏡によりかゝり、片足を前に出し、片足を後に當てゝ、上より覗き込み、やうやう僅かに其耳を見附け、爪先早く掻い探りたれど只影のみにて外に障れる物もなく、餘りに苛立ちて、遂に身の平均を失ひ、牀の上に轉げ落ち、始めて大に悟り、其後は眼前の事にて滿足し、影の如き微かなる事を探るは、全く思ひ止まり、「かゝる知れ難き事を探るは何の要やある」とて、鏡を見捨て、鼠を得んとて出で行きけり。

何人も會得し難き、永久解けざる問題は、智惠ある學者に打ち任せよ、其は彼人々にも我等にも、共に同じく益なかるべし。

其分に應じて其職を務むべし。

智者と梟

一人の智者、常に眞を語るとて、世間の人に惡まれ、責められ、斥けられ、潜かに人志らぬ富なる、其智惠袋を身に擔ひ、遠國に逃れ行き、己が好める靜かなる森の中に入り、浮世の事を想ひ回らしつゝありし時、一羽の梟の、數多の懸巣や烏に取り圍まれ、「阿呆者よ」、「非愛國者よ」、「物知顏なるなまいき者の羽さむし

れ」、「絞め殺して後に罪に陷れよ」などゝ、ガヤガヤとやかましく、罵り辱しめられ、爲べきやうなく、只管詫びて、平和を乞ひ、怒を宥めんと試み居れるを見智者は（智惠は常に心を和らぐる力あるものなれば）かゝる惡言惡行を見聞きするに忍びず、頻りに憐の情を催し、立ち入りて亂妨の振舞を制し、其騷動の原因を正さんとて、梟に對ひ「何故にかく騷がしく、汝の敵は汝の命を求めんとするか」と問ひけるに、梟は答へて言ひける樣、「彼等の忍び能はざる我罪といふは只一事なり、彼等の恨を釀しゝは、我が夜中能く視るとを得るが故なり」と。

智者は智あるがために世に容れられず。

二人の朋輩

二人の朋輩太郎と次郎、或る村に到る途中、太郎は早くも黃金の財布の地上に落ち居りたるを拾へり。次郎は傍より「是は我等に取りて如何なる幸福ぞや」といひけるを、太郎は聽き咎め「否、我等とは言はせじ、是は我一人の物なり」といひければ、次郎は別に答ふべき言もなかりき。それより行くと暫くにして、盜人に出逢ひ、太郎は逃げんとせしが、恐ろしさの餘り、震へて「なさけなや我等は不運なり」と叫び出しければ、次郎はすかさず「否、我等とはいはせじ、只其方一人の事のみ」といひつゝ、ひたはしりに走りて逃れ去りけり。太郎は捉へられ、縛られ、猿轡をはめられ、得たる金をば、盡く奪ひ取られけり。

何人も我一人のみ、幸福を得んと望む者は、やがて不幸の廻り來るなき、晩かれ早かれ其友を失ふに至るべし。

樂を分たざれば苦を分つと能はず。

學者仲間

梟學問の研究のため、其隱家を出で學校に入りて、其物知顏を現し、同級の友に、猫と鵜鳥とを得、共に

同じく課程を履めり、彼等忽ち學業に進み、ヘロドタスをもハリカルナサスのデニスをも、餘す所なく記憶し、又タイタス、リビイの書きたる物など、自由に引照し古人の書をば博士たちの如く覺え知るに至り、或る時、其博士たちの如く、古代の國民を批評せり。

「エジプト人は最上の民なりき。彼等程智く、彼等程法律を守り、彼等程愼深く又天が下彼等程宗敎を重んずる民はなかりき。故に我はエジプトに賞を與へん」と猫はいひけり。

「我はアテンスに賞を與へん。誰れか人類の中に、かくの如き才智、かくの如き風采、かくの如き勇氣を持てる神ありしや。小なる國を以て斯程多くの人物を出し、限ある力を以て斯程多くの功績を遂げし者、他に類なし。故にギリシャは實に萬國に冠たるなり」と梟は述べけり。

「君等はローマを以て最下國となすか、是は戯の言なるべし。其壯大、繁榮、藝術、戰爭に於て萬國の上に秀で、エジプト、ギリシャは言ふも愚か、ローマに比すべき國あるとなし。ローマ人は我が親愛の民なり、彼等は能く海陸の戰に勝てり。何は兎もあれ、君等も是には異議なく服するならん」と鵞鳥は爭へり。

互に己が意見を言ひ張り、鬪論果てしなかりしとき、學者の書物を嚙み破る、頓智の鼠出で來りて、「各方の其說を張るは、我能く知れり。エジプト人は猫を尊び、ギリシャ人は梟を拜み、ローマ人は鵞鳥を最上の鳥として珍重せり。利己心の示す方向に意見は傾くものなり」と口を挿みけり。

曲學阿世は身の爲にす。

註、ヘロドタスとデニスはギリシャの學者、リビイはローマの學者

鱷と鯉

ナイル河の邊にて、二人の子供、水の面に平たき小石

を投げ、其のはねかへりゆくを見て樂しみ遊び居りけるとき、恐ろしき鱷現れ來り、其一人を捉へて、嚙み潰し、直ちに呑み終りしに、其間に他の一人は辛うじて逃げ去りけり、鮫はこの無慈悲の殺害を見るに忍びず、水底深く隱れんとて、急ぎ逃げ行きしに、其途中、如何なる事か、鱷の、不思議にも涙をこぼして泣き居るといふ報知を得、「人殺の惡者も、血の未だ乾かぬ中に、早くも惡事を悔ゆるに至りたるものか、さすがの鱷も良心の刺にさゝれて、悶え居るとか。神は罪なき子供を救ひ給はざりしも、今は却て其讐を報い給ふなるか、何樣彼は悔い居るならば、我行きて彼の本心の告ぐる所に從ひて、導きくれん」と、葦を分けて尋ね行き「君は今日君のなしたる惡事を悲しみて泣き居るか、悔みは誠に藥にて心の痛を取り去るなり、喜び謝して此藥を用ゐよ。可愛き子供を食うとは、恐ろしき罪なるぞ、後悔の涙は倘能く君の心を融かし、君の怖を減ずるなり」と語り聽かせけるに、惡者は笑に堪へ兼ね吹き出し「涙をこぼしゝとは眞なり、されど其は今日我がなしたりし事のためにあらで、餌食と思ひし他の一人を取り逃がしたる事の惜しきがためなり」と答へけり。

惡人の悲しむとき、しばしば斯くの如き涙を流すなるべし。

惡漢は强慾のために泣く。

ローラン夫人とカンチー姉妹との交り（續き）

鐵斧生

マノン、フィリポンがブランセリーに注ぎたる愛情は或る偶然の事よりして、忽ち冷却し了はりぬ。此事は十九號以下の傳記に詳記しあり。一日マノンルキセン

ブルツの公園を歩みたるに、ゆくりなく、ブランセリーに出遇ひぬ。見ればブランセリーは其の帽に鳥の毛を飾り居たり。哲學者が飾毛を付けて居るとは！　マノンは驚きたり。此時より戀は醒めはてぬ。

ソフィー孃に書を與へて曰く。

『奇なる哉、汝恐らくは思ひも付かぬなるべし。彼れの容貌は前と變りし處あるに非ず、されど最早其の容貌に以前と等しき威容を有せず、以前と等しき性質を示さゞる也。嗚呼幻の力は大なる哉！　余は今とても尚ほ彼れを普通人士の上に置く、殊に彼れに等しき年輩の人の上に置く、されど最早彼れは完全のものに非ず、一言にていへば余が戀人に非ず』と。

ソフィーはマノンに對して、十分の友情を表はすことを欠きたり。一千七百七十六年の中頃に及びては、此の友義も已に退潮の傾を示しぬ。マノンの書に曰く、『ソフィー、ソフィー、汝の書狀は餘り延引するに非ずや』と。蓋しマノンがブランセイーを夢みし頃は、ソフィーの思は寺院に在りき。兩友已に全く其の住む世界を異にしたり。其後彼等の友愛は回復されたりと雖ども、たゞ其れ回復されたるのみ、友義も他の諸德の如く、進歩なき時は退歩す。

ソフィーの姉なるヘンリエッタは此時パリに來りて數ケ月滯在したり。而してマノンと親しく交はりたり。ヘンリエッタの活潑なる想像、及び其の頓智は妹ソフィーの幽鬱に比して一段の異彩を現はしたり。マノンフイリポンの友愛は今や、カンテー姉妹の兩人に分たれたり。與ふる書狀は常に連名を記するに至りぬ。千七百八十一年、マノンフイリポン愈々ローランに嫁し、玆にローラン夫人となりぬ。

マノン已にローラン夫人となるや、其の後數年間は夫ローランを助け、子女の敎育に從事し、立派なる妻になりたり。

カンテー家に保存されたるローラン夫人最後の書狀は、ローランと結婚せんとする事を報じたる最初のものなりき。

四年間、ローラン夫婦は、カンテー姉妹の住地なるアミーンに生活したるが故に、此間は互の書狀絶へたり。

されど兎に角に、最早や以前に等しき事は保つ可くもあらず、果して小説の如く、書狀は結婚を以て最後を告げたり。

ローラン夫人此れより後の生涯は説くまでもなし、乃ち革命の花、血にまみれはつ可き生涯なり。千七百九十三年五月三十一日、ローラン夫人投獄さる。

ヘンリエッタ一日之れを獄に訪ひぬ、脱獄をすゝめたれども、ローラン夫人は聽かざりき。

其の後ヘンリエッタ常に言へり『余は彼女と衣服を交換せんと欲したり、彼女獄を出づる間、余自から獄に留まるべしと願ひき。然れども余が祈りも涙も彼女を動かす能はず。『彼等直ちに汝を殺さん、愛するヘンリエッタ』、と彼女は操り返して言ひしのみ、余は遂に已むを得ず彼女を遺こして去り、其後再び彼女を見ざりき』。（完）

おはなし（二）

樫と栗莢　蘭芳

老いたる樫の木あり、一つの樫子を梢よりポテリと栗莢木の上に落しぬ、意地惡の栗莢奴、ムットして

コレサ、樫殿、あき地もあらうに、なぜ僕の上に樫子を落すのだ、僕はやつとの事で、枝をのばす餘地をもつてるぢやないか、憚りながら僕は實を人にやつてもやたらに落しなんかはしないよ、

ときくより、槲

私は今年で二百歳になるが、あの槲子から生へ出る小さな槲は、もつとでも生るよ、

と答ふれば、茱萸いよ〳〵腹を立て、

ナンだと！、よろしい、君の小つぽけな槲奴を絶息して見せう、三日も生かして置くものか、

槲は何とも口返報せず、子息に早く槲子より出でよといへり、見る〳〵槲子は潤ひて破裂れ、小根は地下に入り芽は上に向ひて生へ出でたり、茱萸は其の息をとめ呉れんものをと、日光を遮りしかど、小さき槲は次第にのびて、茱萸の陰にありながら、丈夫に育ちぬ。」其時より百年たちぬ、茱萸はとくに枯死せしも、槲は彼の槲子より生へ出で丶天に達するほどに成長し、四方に其天幕をひろげたり。

海 を 乾 さ ん

或人小舟にのりて帆走りけるに、過て貴重なる眞珠を海に取落せり。即陸に歸り、桶を持ち來り、海水を汲みては濱に注ぎ、汲みては注ぎ、三日に及べども少しも倦める色なし、四日目に水神あらはれ來り、

何故さう水を汲むのぢや、

或人　眞珠を失ひましたから、

水神　だが、もうおひ〳〵やめるだろうねえ、

或人　いや、海を汲み乾すまではやめません、

水神は海の底に沈み、やがて其眞珠をもち來りてこれに與へぬ。

鷺 と 魚 と 蟹

鷺池のほとりに住み、漸く老いて、もはや魚を捕ふるの力なきに至りしかば、如何にもして生きながらへる工夫もがなと、思案をめぐらし、やがて魚に向ひ、

オイ魚君、君達は災難の切迫してる事を、一向知らずに居るねえ、僕は人間の奴原が、池を乾して君達を捕へに來るといふ話を聞いたよ、夫れについてサ、僕は此山の向ふに、奇麗な池があるのを知つてるから、其處に君達をのがしてやつてもいゝが、去かし僕ももう年老て、なか／＼飛ぶ事はむつかしい、

といへば、魚は切に救を鷺に請へり、鷺

それでは僕も君達のため、及ぶだけ力を盡さうが、併し一度に殘らず君達を連れて行く事はできない、一度に一尾づゝだよ、

是に於て魚達大によろこび、皆私をつれて下さい私を私を」といふ、鷺は彼等を運び初め、一度に一尾づゝ野に運びては、己れの食に供へたり。

かくして數多の魚を食せしに、今此同じ池に、老いたる蟹住みしが、鷺の魚を運びはじむるや、何でも此は怪しいと思ひ、

サア私も其の新移住地とやらにつれていつておくれ

といふ、鷺は蟹を捕へて飛びさり、野に達するや否や蟹を打墜さんとせしに、蟹は野に魚の骨あるをみたれば、其螯螯を以て、鷺の頸を挾みて絞殺し、ゴソ／＼池にはひかへりて、事のよしを魚に告げしとぞ。

歌は生命なり

二階には富める紳士、下には貧しき裁縫師住みけり。裁縫師仕事をなすに、常に歌を唱ひければ、紳士は睡眠を妨げらるゝこと一方ならず、如何にもして歌をやめしめんと、或日金を滿せし財布をかれに與へぬ、裁縫師は俄かに富みて、歌ふ事をやめしに、はては退屈し、金を紳士に返していふやう、

金をお返へし申しますから、どふかまた私に歌を歌はして下さい、でなければ私は鬱して死んでし

まいます。

エルシノアの白薔薇

（オフエリアの少時）

空花生

オフエリアは沙翁が悲曲「ハムレツト」中の女主公にして王子ハムレツトが薄命なる戀人の優しき實名なり。こゝにものせるは英國女文界にてシエクスピアに精通すとの譽れ高きクラーク女史がその悲曲中に表はるゝオフエリアの性行事情を揣摩想像して、その幼時を巧みに編みたるもの也。その虚より實を生み影より形を捉ふるの妙實に驚くべきものあり。讀者 幸に余が勝手に之を彫修したる僭越の罪を容るせ。

美麗莊嚴あらゆる當時の華奢を盡し、數奇を弄びたる大厦の裡、奥まりたる一室の窓の戸によりそひで、あたり珍らしく見まはす一稚兒あり。楓の葉なせる優しき右手に窓の戸ざしをいぢり、左手に侍女の肩のあたり確とをさへ保ちぬ。色あくまで白く玉の如く肉目美はしき細おもてに秀でたる額は何所となく怜悧の質と高貴なる威嚴を存じ、隆き鼻、志まりたる朱唇いづれも沈着靜穩の意氣を示し、その福々しき兩頰に絶えまなくたゝゆる笑くぼには勇士もその劍を治むべく、狂者もその狂を忘るべし。その殊に愛らしく大きなる綠の瞳に映るところ、悉く新らしく珍らしからぬはなかるべし。ある時は容貌たくましき髯男の壯重なる面影に接し、ある時は黄金色の髪美はしく波うてる兩頰に、無量の思をたゝへて幾度となくキツスし給ふ優しき人の麗容を見、又ある時は足おと小さけれどこゑ高くふみ鳴し、きたりて荒々しく室の戸をし開けて、快活なるおもちにソツと此方を覗ひみてニツコリ打笑

ひ、忽ち去りゆく少年の後影を見送りぬ。遠く之を眺むれば一團の肉に過ぎざれど、之に近づくに從つて、いよ／＼その靈氣にうたるゝものあらばこの兒が天賦の德なりとす。この愛すべき抱くべき一稚兒、その名をオフエリアと呼びぬ。

父ポルニアス侯、本國デンマルク政府の命を奉し、佛國駐在公使として無期限にパリの都に派遣さるゝこととなりしときは、オフエリアは倘ほ渺たる掌上の玉に過ざりき。

この晴れある榮職を奉して意氣昂然たるポロニアス侯、將さにその任地に出向せんとするに當り、一王朝に一女皇なかるべからざる如く、一公使にも一夫人ありてその權勢、その榮華を共にせざるべからずとの論法を以て、愛妻オードラをも併ふとなしぬ。是に於てオードラはその子女の始末にハタと當惑せしが、種々考慮の末、兄のリーアラスはその叔父の慈膓に訴へ、小さきオフエリアは己が以前の乳母たりしある農家の妻に托さんと決心しぬ。

オードラ玆に於てその愛兒を伴ひ老いたる乳母の住める、ポチルダの寒村をおとづれぬ。新鮮にして清明なる山野の光景、自然の色、聞くもの、見るもの、元より子女の養育を托すべき天地、之に住める者は淳良質朴、洋々たる家庭の和氣、以て睦ぶべく、以て樂しむべし。オードラが切なる離別の悲も、この清明安穩なる光景に對しては幾分か慰める所ありしなるべし。第二の母ともいふべき乳母に久しぶりの挨拶も漏らしがちに、うれしさ悲しさとり混ぜて、その兒の養育を願はん爲めにきたりぬと云へば、この家の主婦も涙ぐみ、年來の御高恩の萬分の一も命あるうちにと常々語りあひつる折から、願ふてもなき仰せ、御大事の御愛娘を御預り申さんは、いと、いと畏れおほけれど、この婆の命あるうちは、決して粗卒はいたし申す

まじく、御不自由はこの茅屋に數かぎり、絶え間とてはあらざるべけれど、それ御厭ひなくば手の届くかぎりは確かに、御安心遊ばしてとの温かき心情に幾度か溢るゝ涙をし拭ひ、二つなき掌中の玉手放して、今はとて出でゆく母のこゝろ、强磁石力に引かるゝ思、その塲に遭遇したる上ならでは流石に語りがたき悲劇なるべし。

稚兒は年若く美はしき母の手より、半ば星霜にやつれたる、新らしき母の手に渡されたること、種々なる悲劇のありしとなど露ほども知らず、如何なる夢や結ぶらむ、只より／＼脣のあたりにたゞよはす微笑に天國の福音を語るより外はなかりけり。

夕陽西山のかなたに沈んで、野邊より野邊に暮れゆく、ほの暗き日影を逐ふて、鋤鍬片手に鼻歌うたひつゝ、歸りきたりしはこの家の主人サイガードにして、之に伴ふはその二子ハラルドとアイバァなり。手足を灌ぐ間もそこ／＼に新らしく彼等の家族となりたる小さき異人を見舞ひぬ。主婦ボチルダ夫に向ひ、オウドラ夫人がその兒の養育料として殘したる一包の金袋を示しながら、なほこの外に、この新らしき珍客の吾等の家族となり給ふ御祝に、酒肴の料にもとて殘したまひしものあれば、今宵は久しぶりにて、一杯過したまへといへば、そはこよなき仕合せなり、如何なる幸運にめぐり合ひたらむなどゝ思はずもらす哄笑の響きに、あはれや稚兒の夢破れぬ。

おもしろし、一人りの儘にして、といひつゝ、サイガードその妻の手をとりて、如何になしたまはんか、吾等見知らぬ者のみの間に、嘸な悲しき顔やなし給はん。

見てあるうちに思ひがけなく、その愛らしき微笑を遠慮なくたゝへながら、四邊の人の珍らしき面もちを守りしが、暫くして己が上衣の裾摸樣を左手に抓りつ

ゝ、蚊の鳴く如き小さき聲して、何事かうたひいでぬ。餘りの可愛さに皆々しばしは茫然として見とれゐたりしが、やがて遽かに思ひ出したる如く、あたり急がはしく見廻はして、吐息一ツ。母様！

ポチルダとジユサの二人は、新らしく小女の上に湧きいでたる悲しき思出をまぎらさんとて彼等が得意の手段を盡しぬ。元より何物にも感染し易く親しみ易きは小兒の自然なれば、半時を要せざる間に、小女はいと〳〵樂しげに見えぬ。直ちに質素を旨としたる食卓に導かれ、パンと牛乳にこの家の第一食を終へぬ。絶えずやさしき乳母の胸に抱かれ、美はしきジユサの微笑に迎へられ、サイガードの無骨なる握手さへも、その身に馴れきたりて、昨日のエルシーアの異人今は全くこの家の温かき家庭の花となり終はんぬ。

この家の愛娘ジユサといへるは、ことし二八の花の色香ふかく、鄙には珍らしき美玉にして、その心根も優に、やさしく、まことに育だち目出度き逸物なりければ、オフエリアの母は早くもその兒の好侶伴たるべきものと思ひ、殊別にその兒の保育を依賴しぬ。さればジユサは、寸時もその側を離るゝことなく朝な夕な、全身の慈腸をしぼりて、その新らしき無邪氣なる友に献げんと決心しけり。

翌朝オフエリアは、面白き遊戲を終へて、疲れたる手足をやすめんとて、その美はしき友の膝上に坐せしが、偶々その部屋の隅に横はれる珍らしき異形を認めぬ。そはこの家の隣れなる不具兒にして、毛髮茫々、極めて醜き姿なりき。璧を楯に床上に蹲踞して、しきりにその兩腕を動かしをるは、その廻はりに飛びかう蠅を捕へん爲なりき。彼方此方に飛びかう蠅を、その氣味惡き額の下より睨へながら物凄き鼻息と共に、赤き舌をベロリと出し、より〳〵その不運の蠅に輕打を與ふるときは、不意を擊たれて、幾多の蒼蠅は、忽ちその手

中に陷り、かたへの累々たる同胞が死屍の裡に葬らるゝなり。あるときは小刀を手にして、その墳墓をこぼち、死屍を無二無三に切りまはし、ある時は生きたるまゝを羽とも云はず、足ともいはず、彼れが荒き親指と小指の間に挾み、全身を慓はしつゝ、喧ましくうなり騷はぐを見ては、凄ましき微笑をもらし、遂には之を放ち遣るかと見れば、忽ち床上に最後の命運を與へぬ。小女はこの無殘なる行爲を氣味惡き驚きを以て、而かも餘念なく打守りしが、ジユサはそれとも知らず、鄙歌小聲にうたひつゝ靜かにその蹽をゆるがせゐたり。折りしも勝手の方にてしばしの手傳ひをと呼べるボチルダの聲しぬ。是に於てジユサはオフエリアを靜かに床上に置き、その側に二三個の弄物をならべて、直ちに歸へるべければと優さしく、その頭を撫し、勝手元へといそぎゆきぬ。小女は殘されて只一人、猶ほも蠅殺しの方を打守りしが渠は忽ち此方に向き、オフエリアを凄き微笑に包みながら

御身はエリの小供衆にや？

答はなかりき。

若しは又ツロールス人にや？

再び答はなかりき。

御身は只一小女なれど、美はしき方なり、御身はさる貴族の令孃にておはすならむ。と云ひつゝ渠れは遽かに床上を下りきたりて、小女の側にきたり、

きたまへ、熊の所に、共々に手をふりて遊ぶべし。

依然答なかりしが、その頭を左右にふりたるは不同意のこゝろとも知らず。熊の方にゆき給はぬか？きたまへよ、予は御身を食ふものにあらず、只御身を抱くのみなり、きたまへ熊の方へ！といよ〳〵言ひ募りあはや抱きつかんず風情なれば、小女は堪へかたくいたくその頭をふりながら、一聲高く

否とよ！

かくときゝて彼は側への小刀を荒々しくその手にとり、彼方の堆高き蠅の死屍を指ざしながら白き歯、むき出し、

何といはるゝぞ？ この小刀を御身に投げ付なば、この蠅の如くに御身の手足も斷たるゝとは思ひたまはぬか？

オフエリアはこゑを限りに助けを求めぬ。直ちにシユサとその母いりきたりたり。

高慢なる家娘は予が熊と共に遊ばんといひしを拒みたり。と云ひてベロリと舌を出したるさま、母も姉も物の數には見えず。

從者よ！ とポチルダは嚴しくその頭をふりつゝ、

母が言葉を忘るなよ、御身がなしたるは全く惡しきとなるぞよ、吾ポロニアス侯の御息女にておはすこの孃子を、御身は誰れと思ひ給ふか、吾家に置かせ給ふは、よき氣付の爲めにて、決して之を害し之を驚かしまつるべきものならじ。

予は彼女を害せんとはなさゞりしよ、只共に遊ばんとを望みぬ、されど彼女は從はざりき。

利巧なるウルフよ御身は決して爾後如何なることありとも孃子に觸れ給ふな、孃子は熊も御身も如何程よき遊中間なるかを御存じなければ、いかで容易く御身に從ひ給ふべき。吾が愛するウルフよ御身が令孃の友たらんとを願はゞ、先つその御心にさわらぬ樣、優しく歡ばしまつるべし、姉とても始めより斯く親しかりしにあらず、御身も知る如く、母上の手より吾れに來給ふまでには、如何ばかりの盡力をなせしぞ。と姉のシユサ流石に優しく、教ゆるが如くさとすが如く言ひ含むれぬ、

シユサよ御身はいつも、自分の爲すことを吾れにも爲さしめんとすれど、予は御身を欣ばさんとこゝろは更

になし、姉御よ御身は吾熊によき食物を與へてよ。

＊　＊　＊　＊　＊

サイガードの家屋は、この村落の小高き地面に建設されて、前には遠く限りなき青草緑野を眺むべく、後には北より東に連れる鬱紆たる森林ありて、四時常盤の色ふかく、花咲く春のあした、雪つもる冬の夕、いつも樂しく、心地よきは郊外の散歩なるべし。ジユサは出來得丈オフエリアを快活の天地に導き、自然の發達をなさしめんと勉め、朝まだきより小袋に晝の餉を用意し、野邊より野邊に、森を越へ、谷を渡り、花を折り、草をあさり、日の暮るゝまで、彼處此方を逍遙するを日々の課業となしぬ。サイガードは未明よりその二子を從へ、鋤鍬荷ひて出でゆき、夕べの星を數へつゝ、歸りきたり、忙はしく食事して間もなく眠りにつき、ボチルダは一日一夜、家事の爲めに寸暇なきに加へてウルフといへる厄介種あればオフエリアのとは全くジユサに一任して、心うちとけて語らふとも少なければ、オフエリア家に在りては何となく、さびしく心細く思へど、ジユサとのこの逍遙は、森間生涯中尤も幸福にして樂しき時なりき。ある時は小高き丘に遠征をこゝろみ、あるときは遙かに野原を横ぎりて、海濱のほとりにさまよふ。寄せてはかへしくだけては散る白濤に、うつゝをぬかし、夕日に輝やく砂、石、貝の類は忽ち、晝餉に代はりてジユサの小袋を充たし、颯々として吹きおろす松風にこゑ合せて、ジユサ歌ひ出せば梢に飛ひこふ小鳥と共にオフエリアも調子を合せぬ。足は疲かれ身は勞すれども、此般の快樂はいつまでたてど共に捨てがたき思ひして、覺えす夜に入りてかへりきたるともありき。

されど家に在りても、折々は豫想外なる御馳走にあづかると少からず。ある朝厄介小僧ウルフは炊事場の側にありき。その汚れたる大なる兩足を曲げて、その

股と脚の間より髯武者の荒々しき兩手を出だし、長き腮を曲げたる兩膝の間に挾みながら、鼻うごめかしつゝ七輪の上に美香を放てる小鳥の燒りものを守りゐたりしが、忽ち側にありしオフエリアの方に向き

御身はこを欲しとは思ぼさずや？

オフエリアは小さき頭をふりぬ。

孃子よきゝたまへ、こは美はしき鳥なり、その歌ふこゑは實に美はし、されど之を食ふにいたりては、その容形も、こゑも物の數ならず。と云ひつゝ渠は耳のあたりまで、その凄まじき口を開きてカラ〳〵と打笑ひぬ。

オフエリアこの樣に戰慄しぬ。

きけや―ブズ〳〵燒けゆくおとを。と云ひつゝ、ふさ〳〵として肩のあたりまでさがりたる耳は前後にゆり動きたり。このかぐはしき香をかゞずや！　と云ふとき滿面に青赤き火花を散らし、平扁く大きなる鼻を物凄く鳴らしぬ。しばらくして彼れはその拳に火上の小鳥を攫みうれしさ堪へかたき風情にて小女の方に示しながら

しなしたり！　しなしたり！　御身は欲しと思はずや？　と云ひつゝ髮おどろなる額の下より血眼ひらめかして、小女とその小鳥を等分に打守りぬ。

オフエリアは彼れの行爲には既に慣れたれば、左程までに驚かされど、燃ゆるが如き、小鳥の燒りものを、玉にても攫むが如く、熱しとも云はず、欣然として握り保てるを見て流石にいぶかしさに堪へず、且つは彼の手熱さに燃けはせずやと思ふ心配禁じ難たく、遂に口を開きぬ。御身はそを熱つしとは思はずや？

ウハヽヽ比ぶれば熊の腕は餘り硬し、予は熱きが大好物なり。と云ひつゝ小鳥の一疋を一口に頬ばりぬ。骨も皮も、頭も尾も一切關はず、舌皷うつて、咬み食ふおとの物凄さ。食ひ終りて冷かに笑をもらす時など

は到底人間の業とは見えず、オフエリアがある野獸の變形ならんと思ひしことも無理ならぬ次第なりき。されど敢て敵視するに非ず、懼ろしきもの見たしの好奇心に驅られて、曇り勝ちなる雨の日の徒然を慰めぬ。

（未完）

家政

梅雨中の家庭

一年に一度は梅雨の候となり、三七日より風又雨欝陶しき事限なし、されば詩にも歌にも五月雨時候の幽欝無聊なるを嘆ず、實際を言へば吾人都會に生活する人民には、雨は不必要なれども、農家に取りては實に大切のものなり、吾人も農家の作りたる米麥の爲め生命を繫ぎ居るものとすれば、必らず天に向つて梅雨の天氣をかこつべからず、今や梅雨の候に入り、農家は種苗の好時節にして、水田に入りて泥土にまみれ、粒々辛苦の最中なれば、吾人は此梅雨に遇ふも、猥りに怨言を吐くべからず。

併しながら梅雨中は天氣好良ならず、天氣好良ならざるは大に家庭に妨害あるものなれば、梅雨中には之に應ずる家庭の心得なかるべからず。

梅雨中は家庭の裡シト／＼として濕り勝にて、黴を生じ黴より毒を產するに至る、「コレラ」其他恐るべき疫病の原因は黴菌より生ずるとせば、必らず油斷をなすべからざる時候なり、此黴を撲滅する第一の策は洗濯に過るものあらず。

衣服、夜具などの洗濯は實は入梅前に悉皆結了し置けば、黴も生へず、都合好き事なれども、手の廻りかねて梅雨に入りても成るべく手遲れせぬやうに心懸け、洗濯に取りかゝる以前に於て、よく／＼天氣の都合を見はからひ、好良の天氣に早朝より洗濯に取りかゝる

べし。

入梅過ぎまで汚れたる衣類を打捨て置く時は、濕氣は去れども汚點と黴とかたまり、洗濯に頗る困難なるを覺ゆべければ、必らず入梅前若しくば梅雨に入りたる今日ならば、入梅中に此化事を終るべし。

洗濯法は大概人の知る所なれども、一通り記さんに、甚だよごれたる木綿衣類ならば、釜か鍋の内にて洗濯曹達を投入して煮るべし、斯くする時は其衣服に附着したる病毒を去るの效あるのみならず、汚點は能く落ち去るなり、垢と汚點の少き木綿物ならば、盥の中に置き上より熱湯を注ぎ、暫時放還し置き石鹼又は洗濯曹達にて能々揉み洗ふを可とす。

絹布類は成るべへ洗はぬがよし、併しながら肩襟などに垢の附着し見ぐるしきならば、摘み洗ひを爲すべし、形は石鹼湯（微温なる）か、米泔汁の中に浸し、手にて揉まぬやう振り注ぐべし、「フノリ」を用ゐて洗へば其效著し。

白「フランテル」を純白に洗濯せんとならば、白石鹼百七十目に硼砂二匁五分（藥種屋にあり）の割合を以て微温湯にとかし、其内にて洗濯するを要す。

木綿の單衣物などは洗濯し終らば「ふのり」か「ひめのり」にて薄く糊をつけべし、併し餘り濃過ぎなば、午の生皮の如く始末に惡かるべし。

洗濯したる後其品物は充分絞りて水氣なきに至らしめ、且つ充分日光に干し乾すべし、水氣殘らば又もや黴の生ずるの不幸に遭遇するを免かれぬものなり。

洗濯したる衣類は成るべく戸棚の上段か、簞笥の裡に仕舞ひ置け、さなきに於ては梅雨中は雨水床下に流れ込みて自然濕氣渾々たれば、洗濯の甲斐なく又もや濕氣に當てられることあり、注意すべし。

蒲團、夜具等の大物は入梅中は洗濯はチト奧行なれど、爲さゞるには優れり、其方法は蒲團の上被をほどき、

中なる綿を取り出して一應日光に曝し、上被は以上に述べたる木綿洗濯法によりて洗濯し、其儘に上被は上被、綿は綿と別々にしまひ置き、入梅開後に至りて閉ぢ合はするも亦直様蒲團と爲し、好天氣の折々には竿にかけ日に當つべし。

又梅雨中殊に注意すべきは臺所なり、臺所の流元は平時さへ水氣停滯し易く、其吐口には食物の殘片を止め、其の甚しきに於ては流元には黴菌を生じ一種の臭氣を發するに至る、今年は「コレラ」等の悪病我國へ侵入し來り、稍々蔓延の勢あれば此際一家の主婦たるものは、能々心を用ゐずんば、不測の禍害に遇ふも後悔先に立たぬぞかし、是等の禍害を避け安全に生活せんとならば、先づ流元は日々奇麗に掃除して邪魔物の滯こらぬやうに吐口を貫通して、遠く汚穢物を去らしむるを要す、これには細君にても下婢にても日々一度づゝは必らず小さき箒にて吐口の溜り水を下水の方に導き去り、アトは又清水にて洗ひ流さば一日も汚穢物の流元に止まることなし。

手桶には成るべく水を汲み置かず、水瓶に水を貯へ置き、緩急の用に備え置くを要す、手桶や桶が始終水に浸されある時は、如何なる病毒を醸成するやも量られず、故に其用を終らば桶、手桶類は逆に伏せて全く水氣を去り乾燥せしめ置くべし、水瓶は梅雨中日和の好き折には、悉く在中の水を汲み出し、能く瓶内を掃除し、別に新しき水と汲みかゆべきは勿論、其底と蓋とに氣を注けて悪蟲の發生を防ぎ、又夜間は蓋を嚴重にして、蚯蚓其他蟲類の侵入を防ぐべし、殊に梅雨中には蚯蚓等は大に跋扈し、たとひ水瓶に嚴重の蓋ありとも、一分の隙間より這ひ込む術を有するものなれば、蚯蚓多き臺所ならば清潔なる布切を水瓶の上に置き、其上より蓋を爲し置かば、此敵をくひ止むること容易なるべし。

食物の入れらるべき戸棚も梅雨中天氣の好き時には、熱湯を注ぎて能く掃除するを怠る勿れ、其戸棚の内にある皿、茶碗、鉢などの食器も同時に湯に入れ、殊更に注意すべきは、底の深き飲食物の容物は念を、入れて洗ふべし。

飲食物を藏むる「ねづみいらず」の如きは、熱湯を入れるに困難なるものもあるべければ、熱き雜巾にて隅より隅まで掃除すべし、而して梅雨中は濕氣ある魚類、又は漬物類を貯へ置くは宜しからず、生魚を貯ふれば梅雨中は奇態に早く腐敗す、たとひ煮附たる魚類と雖も一夜越などは得策にあらず。

臺所以外なる各室に至るまで清潔に掃除すべし、梅雨中は疊甚だシト〱として居るに快らぬものなれば、天氣好良の日には、雜巾を熱湯に浸し、カラ〱と絞り上げ、それにて疊を拭ふべし、其序に柱、鴨井、敷居、椽側、障子、襖の縁なども丁寧に拭き、毫も汚穢と濕氣のなきやうにし、折〱は戸、障子を外づして太陽にさらし、且つは室内の空氣の流通轉換を適宜にすべし、五月雨時には、能く此機會に乘じ諸種の蟲類湧き出づるものなれば、其防禦怠るなかれ、世に瞿曇華と稱する十年に一回花咲といふものは、其形花に似たれども、實は一種の蟲類にして、天井、鴨居に其繁殖をはかるものなり、是等のものを見出をば遠慮なく排斥して毫も假借する所なきを要す。

梅雨中は床下非常に濕氣を滞ぶれば、揚板の下に履物、靴などを置くべからず、啻に黴の生するのみならず、大に其質を傷め再び使用するに堪えざるに至るべし。

梅雨中は寒暖常なき時候なれば、小兒の養育に心を注くべし、殊に赤兒に於て然りとす、其日の暖寒に應じて衣服の輕重を考へ、一通りの衣服のみにて押し通すは宜しからず、第一風邪を引かさぬやうにすべし、風邪は萬病の基となるを忘れ玉ふな、大人と雖も梅雨中

の不時候には攝生を守るべし、飲料水なども一旦煮沸したるものを用ゆるやうにし、如何に熱氣に渇ふも氷水を激飲すべからず、これより偶々腸窒扶斯又は腸加多兒の原因となることあり、脚氣患者も梅雨中不時候なると家屋の濕氣多きとにより、初患又は再患するもの珍らしからざれば挽割麥、小豆又は消化宜しき飲食物を爲して養生を第一とすべし、痔疾も此時候に起り、腫物も此時候に起るが常なれば、是等の持病ある人は殊に飲食物と身体の清潔に注意ありたし。

此頃寐苦しきは蚤をいふ惡蟲の爲めに皮肉を刺され、是れが爲めに安眠を妨害せらる、此蟲梅雨時候を好機とし續々蕃殖して吾人々類を惱すこと夥しきものなれば、言ふまでもなく部屋々々を殘りなく掃除し、疊の敷合などの埃塵を去るが蚤を防ぐ第一の手段なり、これにて防禦しきれずば、市中にて賣り捌く「のみよけ」(インセクト、ポーダー)を求めて疊の敷合せ又は寢床又は寢衣に散布すれば、何分か此害蟲を防ぐに足らんか。

此ほかにも梅雨中注意を要するもの頗る多けれど、右は其中の重立ちたるものを揭げたるに過ぎず。

昨今の惣菜物

松魚

昨今は『目に青葉山ほとゝきす初松魚』といふ時候なり、『時鳥白い刺身はもうくへず』といふ狂句さへあり、此魚の爲めには布子を飛ばすとさへあるからには、東京にて如何に松魚を賞翫するかを見るべし、松魚は昨今が最も時候にて其價も「まぐろ」に二倍す、扨此魚は如何にして食ふべきや、言ふまでもなしさしみ第一等なり、煮附、鹽燒共に大に刺身より食ひ劣りす、刺身は水あらひして三枚に卸し皮を去り、縦に二つに

切り成るべく大つくりして生醤油にて食すべし、當時第一等の御馳走なり、此外にぬた和物、てり燒などにて用ゆれど、葛あんかけは一寸變りて面白し、これは松魚を三枚に卸し、骨附を去り正身を能程に切肉となし、一旦湯煮して其上より葛のあんをかけて食すべし（葛あんはあんかけ豆腐に用ゆるものと同質にして、味をつけたる醤液に少し濃く葛粉をひきたるものなり）

なまりぶし

なまりぶしは鰹を二節に卸し、竪二ッ切りにして蒸したるものなるが、これからの惣菜には頗る妙なり、此料理は切肉にして煮附るか、摘み砕きて煮附とすべし、あられ（小角）にきりて生にて山葵醤油かおろし大根に生醤油にて食すれは又一種の風味あり、今少し平民的ならば卯の花（豆腐の滓）煎りにすべし。

蕗の精進料理

此頃は家の周圍などに蕗が今を盛りと延び榮へぬ、蕗の料理は何が一番うまかるべきや、蕗と燒豆腐の取合せは殆ど影の形に添ふが如きつき物なり、其法は先づふきの莖の皮條を取り、葉を去り茹でゝあくをぬぎ、一寸程に切り、燒豆腐も能き程に切り空鍋の中にて煮れば、豆腐の汁出る、此汁を去けて蕗を入れみりん、醤油（腥料理ならば鰹節をだしに使ふべし）にて暫時煮て又醤油をさし煮しめるなり、蕗ばかりきやらぶきにするも好し、蕗の佃煮は醤油ばかりにてからく煮つめ、唐辛子を加ふるは嗜好にまかす、蕗の佃煮は極暑と雖も一週間はもつなり、又蕗の薹も食用となる、則ち其の若きものを其まゝにて茹で、其汁は他へ流して苦味を去り、酒と醤油にて煮て、其の煮上りし時、砂糖を勝たせて煮つめべし。

睡眠と食事

睡眠と食事に就きては吾人屢々此事を記したれば詳細

の議論を要せずと雖も、更に一言すべし。

睡眠と食事は正確に規律を守るべし、睡眠は通常七時間乃至八時間を適度とす、これより以下も以上も共に害あり、又毎日睡眠の時間を定めたらんには、必らず日々其通りに履行すべし、食事に於ても然り、三度と定めたるものが、二度に減じ、或は四度に增すなどは共に身體に害あり、又飲食物の分量に於ても日々一定し置くを要す。

然れども人には俄の出來事や、不意に繁忙を極むることありて、平常一定したる睡眠時間を規律通りに實行し能はざる事情頗る多し、か丶る塲合には如何にすべきや、其翌日睡眠すべき閑暇あらば、夜間の睡眠にさまたげなきやうに暫時間の睡眠を試みて前夜の不足を補ふべし、若し翌日睡眠すべき時間なき人は、食事に充分滋養の物を用ゆべし、滋養品とは鷄卵第一等の品にして牛乳、ソップ、肉類等、平生一定の食事分量ありとも、か丶る臨時の塲合には平生より二倍以上の滋養品を食するも妨なし。

手藝案內

造花の細工

造花の術は『人造の花』として本雜誌第廿九號に案內したるが尙ほ詳しく述ぶべし。

時下初夏の候とて三春落花痕なく牡丹、芍藥亦盡きて僅に花菖蒲を剩すのみ、此時に當りて造花の手藝を案內する、決して徒爾にあらざるべし。

然れども人造の花は到底天然の花に及ばざれども、人は美術を愛し技藝を好むの性あるを以て、天然の花よりも却つて人造の花を愛するなり、見よや、花簪は頭髮の上にかゞされ、活花として花瓶、盆栽にあるを、其眞なる事、其美なる事到底天然の花に及ばざれど、

世人斯の如く好遇する所以のものは人の心に美術、技藝を愛すればなり。

今日に於て造花の需用頗る多く、花簪のみにても其製作極めて複雜せるものなれば、これのみ心得ても充分婦人の職業とするに足るなり、歐米にても此術早くより發達し、殊に婦人の帽子の修飾として多く用ゐしなれば、彼國の婦人等は此道によりて獨立して立派に生計を立て行くもの多きを見る、我國にては未だ男子の職業たれども、これより追々婦人の專業とならんことを希望す。

さて造花の案内をせんに、先づ造花術には如何なる道具が必要なるかをいはん、此事は先號にも一寸載せ置きたる通り、剪刀、ピンセット、鏝、打貫を重なる要具となす、剪刀は切斷の用に供ふるものにして、刄の長くして先の細き大形を撰むべし、鏝は如何なる用となるといふに、花瓣の凸凹屈曲の細工に用ゆ、鏝の種類には筋鏝、瓣鏝（二本）丸鏝（六本）菊鏝（二本）其他頗る種類多ければ、一々購求するの煩に堪えざれば、右の一通りに成るべく間に合はするが宜し。

「ピンセット」とは活版屋の職人が持つ唯一の品なり、大小色々あれど、餘り大ならざる形を撰むべし。

打貫は其形狀は筒の如く薄き金屬の曲物なり此道具を以て打ぬくに從ひ、花又は葉となるべき切は其中に入り重るゝ之を上の穴より出す仕掛なり、又上よりつきて下の口に出すもあり、其種類一々記するに遑あらず、それにて理なきにあらず、打貫は或物に限り譬へば櫻の花とか、紅葉の葉とか各々それに從ふ型ありて一物一本に限りて用ゆるものなれば、いろ〳〵の花と葉を打貫かんとならば、其數また天然の花よりも多からざるべし、何となれば天然の花を悉く摸造せんとすら天然の花だけの花と葉若しくは蔕を打貫かざるべからず、かゝる時は打貫道具の類は莫大なるに至るべけ

れば、打貫も常に用ゆるものは、七八本にして小菊打貫、菊葉打貫、薔薇打貫位にして置くべし、いろ〳〵の花形、葉形を好みたりとて鍛冶屋に賣品なし、強いて異りたる形を製せんとならば鍛冶屋に注文するを要す、併しながら器用なる人は不足せる道具にて其道具以外のものを製すること、不器用なる人が適當の道具を用ゐたるものより出來上り見るなり、總して細工物は道具に依らず、器用と熟練に依るなり、何事に依らず活用とは此邊の事なり。

これより少しく道具の使用法を記すべし、剪刀は成るべく早く使ひならひ、手數少くして品をいためぬやうにすべし、大なる厚紙などを二分する時は兩片を損せざるやう注意して切斷すべし、摸型なきものを切るには鉛筆などにて實物の通り形をつけ、以て其道案内を置かば大に便あり、銅線又は其他の堅き物を切るには、紙切と同一の剪刀を用ゆる勿れ、これは別に一挺の剪刀を備え置くべし。

「ピンセット」は造花術はいつも手を放さゞる頗る忠義の道具なり、凡て花瓣、葉などを拔挿するに手指にては、汚れ又は破損なしとも限らず、故に「ピンセット」は指の代用を爲すものなり、又締、布、花瓣、葉等を染むるときも「ピンセット」を使用するやうにするが良し。

鏝はなるべく輕くして力の入り易く、早く且つ善く利くやうに使用するを第一の上手と爲す、又燒加減も注意し、品物によりて燒加減を見はからひ其緩急遲速の度合を能く了解み居るべし。

筋鏝は條をつける時に用ゆ花瓣、又は葉の筋目をつける道具なり、瓣鏝は單に瓣の筋をつけるのみに用ゆるなり、大小二本もあらば大抵の事は間に合ふと知れ。

一瓣を一度にくぼます時に使ふは丸鏝なり、これには大小數種あれど六本あれば充分なり。

菊花を作るに是非とも菊鏝を要するなり、菊の花瓣には縦に筋ありて二條三條あれば、鏝にも亦二條三條の區別なかるべからず、櫻鏝はは櫻花を造るに用ゆ、これには三條のすぢをつけあるなり。

打貫の使用法はなるべく堅き木の木口にて製したる臺の上に貫き取るべき品（譬へば花瓣又は葉）を置き、打貫を直過に上より木槌にて打ち貫くべし、打つ時に臺の傷まぬやう注意すべし。

右の造花御用具の代價を聞きしに、「ピンセツト」（代十錢位）筋鏝（代五錢位）瓣鏝大小二本（代十錢位）菊鏝大小二本（代十一錢位）櫻鏝（代十錢位）丸鏝六分（代十錢位）同七分（代十一錢位）同一寸（代十八錢位）櫻瓣打貫大小二本（代七十五錢内外）薔薇葉打貫、筋形鏝臺共一組（代大一圓内外中八十五錢位、小七十五錢位）なりといふ。

尚ほこれより其道の人に糺し種々なる草花の實地製作法を案内すべし。

（つゞく）

粧飾一斑

流行の栞

流行の散髪

春夢

前々號の本紙上に於て婦人髪の流行を記したるが、今號には男子の散髪風を少しばかり案内すべし。

次第に暑氣も加り、最早華氏八十度以上の温度となりたれば、衣服調度が夏向則ち簡略となると同時に、散髪も亦簡略とならねばならぬなり、百日鬘に似たる散髪の獅子でも出さうな深山深藪に五味と雲子とに宿られ、外目より見るさへ氣味惡さは宜しく長鋏を用ゐて大革命を斷行すべき時なり、香油澤山の七分三分の分髪なども、夏向には餘り結搆ならず、これからの散髪は淡泊なるを上策なり。

さて冗言はさし置きて現今の散髪流行形を言へば、紳士風とも稱すべきは、前の方は辛ふして分けらるゝやうに調へ、兩鬢と後部とは摘めぬ位に苅り盛せるもの、紳士とか呼ばるゝ社會に最も多数なるが如し。

髪の分方は素より左方分にして、先づ四分六分の割合なり、併し必らずしも左分に限るとは言はれず、毛髪の生へ工合により右にても左にて

も差支なし、又左の方へ腫物の形でもある人は右分たりとも勝手たるべし、又眞向より分け通すも折々は見受けらる。

最も淡泊したる髪風は三分刈、一分刈に過ぎるものあらじ、學生諸君は此風に刈るなり。

髭髯は餘り流行せず、併し髭だけは相替らず髭尾のひねり上りしものが自然の形に任せたるもの兩方の中行はれ、口上唇を蔽ふやうなる風は全く廢れたり、全体髭髯は其人の顔の長短に依りて其好を異にし、長顔の人は髯を生やさす、大低鼻下にのみ存するを常とす（何となれば長顔の人は鼻下の長きが常なれば髭を生されば何となく顔が閒が抜けて見ゆるなり）又長顔の人は頬髯を延ばして、顔の格好を調ふもあり、短顔即ち丸顔の人は無髯を常とすれど上下の髭髯を延して顔を長からしむ。

眉には剃刀を當ぬを好む、又鼻毛、耳毛は西洋人は一切剃らす、併し日本人はうるさいとて剃刀を常てるもの多し。

桐製の櫛笄

夏向の髮具は選に詳しく案内したり、夏は言ふまでもなく淡泊なるを第一とすればこそ丁貝製又は象牙製（實は飽牙製）のもの勢力となりたれ、丁貝も象牙も、乃至白珊瑚、白瑪瑙も其外見頗る涼氣なり、外見の涼氣なるは夏向に最も適合すと雖も、其重量も輕からればならず、丁貝、象牙、白瑪瑙、白珊瑚等其外見には中分なけれど重量は冬の髮具と差違なし。

近日尾張町松田白牡丹木店にて工夫發賣せる桐製の櫛笄を見るに、其型は通常の櫛笄と異なることなけれど、其意匠は誠に賞するに堪ゑたり。

其工夫は普通の桐を櫛形及び笄形に挽き其上に金銀の蒔繪を施し、其蒔繪はいろ／＼なるが、此品の技藝の妙なる處は、此の柔き桐に鋸を入れて歯を立て、又た蒔繪の砥出に地質を傷けぬ所は流石其道の細工なり此品の輕やかなると言ふまでなければ、夏向には最も砂なるが、さて此櫛笄は本鼈甲や蒔繪や一通りの櫛笄はさし飽き何か變つて面白きものをと望める人の使用品にして、素人の目より見る時は、却つて僞鼈甲に金色のピカ／＼たるが價値あるやうなれど、此品の意匠の巧妙なると技術の至精なるとは、價格の廉ならざるによりて知るべし（一組三圓以上）。

同店にて昨年の夏向の櫛として薄き黄楊櫛を出し、忽ち世の喝采を博したるが、此品も中等以上の社會に流行すべし。

今までの處にては桐製は櫛と笄に止まれども、愈々流行の境に至らば、向櫛にも此意匠を用ゆるに至るべし、簪の序に向櫛の佳品を紹介せば、象牙の製品先づ指を折るべし、近來彫刻の模樣面白く、月宮殿、花籠、紅葉狩、牡丹模樣最も多く見受けぬ。

寫眞術の流行

近來華族社會、上等社會に寫眞術の流行するは、社會のために祝すべきの兆なり。

閑は罪惡の基なりとは千古を通して格言在り、上等社會の男子及婦人が罪惡に陷るは職として閑の有り過ぎるに歸因す、語に小人閑居して不善を爲すといへど、決して小人のみに限らず、大人と雖も稍もすれば小人となりかはるものぞかし。

然るに近來上等社會に寫眞及美術の研究あるは、其の高尚なるは言ふまでもなく美術、技藝の發達の爲め、大に祝賀すべき現象なり。

上等社會の人其自身は新しき娛樂を得るは、山川原野を跋渉し、若しくは名所舊跡を尋れ、若しくは紅塵萬丈の世俗社會に入り現狀眞景を寫すに止まらず、之によりて大に社會的智識を博ふす、上等社會の人が社會的智識の博きは、他の社會と親近し、經驗、共同、同情、仁愛等の生する所以なり、必らずしも寫眞術に限らず、希くば上等社會なして家屋外の娛樂を取らしめんことを。

寫眞術の詳細は再び報しまゐらすこともあるべし。

京坂夏衣の流行

珍奇を好むは人情の常なるか、東京人士が西京の產物(お召縮緬)を好むが如く、京大坂の人も亦關東製產の織物を好むの傾向あり、即ち之を事實によりて證明せば目下京坂にて大流行の盛況を極むるものは夫の伊勢崎銘線なり、これは男女老若上下の社會を通して大に持て囃され、婦人は白地、肉色、藍鼠、淡柿等の地色に微塵縞を多く着し、男子は藍鼠地又は紺地の微塵、大名、千筋、萬筋、細挌子等着す、娘連は紺地、お納戶地の矢絣及井桁挌子か、或は淡鼠地、肉色の珍絣を着す、小供連は紺地の大飛白か大縞多し。

次は結城の紬縞頗る多し、柄は男女を通して紺絣とお納戶絣に限ると斷言するも過言にあらず。

次は八王子製の瓦斯糸結城或は愛知製の結城又は東京近在にて產出する木綿紺絣(所澤)又は松坂縞を着用するものを多く見る。

これ必竟京阪人が經濟的、平民的、實用的に眼目を注ぐより來りし顯象にして、東京人が價格尊きお召縮緬を用ゆるの意と大に其趣を異にせり。

併しながら斯様なる丈夫向のものを用ゆるに係はらず、京坂の婦人は惣して外出の際には襦をかけて衣服の破損を防ぎ、其下より幽禪縮緬の腰卷を露して蓮步を運ぶを見る。

右は流行物觀察同好の友某、頃日京坂地に旅行し博覽會又は大坂凱旋會の人盛りの中にて親しく觀察したるものと知り玉へ。

又西京通信に曰く。

婦人向の者は薄物衣服は風通織の上布加茂川明石等を第一とし綾上布加茂川上布之に次ぐ(代價八圓より十圓位)續いて明石越後絹上布等の地色は凡べて錆利久薄納戶等を好み柄は千筋大名片葉等尤も行はる。

◎帶　は晝夜にては繻珍の本紫色又は錆茶と黒繻子の腹合はせ尤も多く昨今漸く博多の一本獨鈷流行の勢あり尤も丸帶は厚板織糸錦織等繻珍の上に位す色繻子も近頃漸く川ひらる。

◎浴衣地長襦袢地　は加茂川染墨繪夜景の圖第一として江戸繪都名所大極殿等もよく用ひらる木地は絽友仙を主とし色は本紫薄口に越す者なし

◎男物着類　は矢張りさつ摩上布を主とし加茂川平上布諸糸織等之に次ぎ凡べて越後の白かすり一般に用ひらる一時流行せしセル地は下ハヤ好まざる傾きあり（婦人にてもセル地中合羽は流行に後れたる様覺ゆ）

◎帶　は薄利久或はお納戸色の單帶か袋織多く又雨かいき縮緬卷帶のり付きも稍々流行の兆あり。

◎羽織　は紋付き物にて絽、紗等無地物にては縞染明石縞物にては加茂川明石壁上布に次ぎに越後絹上布等とする様見受らる。

流行の夏半襟

地質に二種あり、一を絽縮緬と云ひ一を給子絽と云ふ、前者は用ひて肌心地よく後者は肌に纏綿して汗に染みやすき憂あり、故に絽縮緬の方大に行れ今は半襟社會の王位を占むるやうになりぬ、偖其の地色は年増向にて利久、千歲、藍鼠、壁鼠、貴族鼠等にして模様は葱、桔梗、櫻梅、松葉等最も多く、或は模様の附かざる無地も又淡泊なる故にや隨分用ひらるゝ様なり、次に令嬢向には櫻鼠、淡藤、若楓、裏葉、水淺黄、淡紫、肉色等に、菊、牡丹、紫陽等を種々に崩して附たるもの最も流行を極めり、次に十歲前後の女子には矢張絽縮緬の紅地、藤、肉色等の大模様にして若かも模様に金の縫刺あるもの盛に流行す（價格は大人物にて三四十錢、小兒物にて廿錢前後とす）

沙天地の蝙蝠傘

近き頃より柄行替りし傘地市場に現はれたり之は沙天地と呼び表面白茶地にして裏面は薄青く兩面染にて張揚たる處ろ見場よく價は繻子地張傘の上を行き十軒ぼれパテント製大形一圓四五十錢より一圓二十錢位まで變柄として一寸人の目に止まれば追々流行をも成すべきか併し地ほ賣出小口として市中店置の品は至つて少なし、絹綿地張は荷販げ特に宜く一般賣荷容の三分の一は占むべし、紡績綾地張は追付け品切の模樣其賣口の宜を推知るべし價は居据り十軒骨一圓より一圓二三十錢前後なり、絹綾十軒張普通二圓二三十錢、平甲斐絹は綾に壓され仕入元の少なき爲め自然價に氣を持ち張揚たる傘の價壁は綾と差して變らず、凱旋兵士の東京に引揚なば古郷への土産にと革靴類洋傘などは必らず多分の販荷あるべきと豫期したるに手荷物包も柳小李にて間に合すと云ふ質粗主義を執り傘類も割合に販荷なかりしは案外なりき、然し世の景氣の兎角沈み勝なるに引替へ昨今相應に賣口宜しとは必竟季節物の故にも依るべし

記者稟す前號には特に誤植甚しく記者實に汗顏に堪へず讀者幸に諒せられよ

史談

百年前の海戰(上)

速射砲もなく魚形水雷もなく蒸氣機關すらもなかりし百年前の海戰、加之ツラファルガール、ナイル等の大戰にもあらぬ云はゞ一騎打の海戰、言新しく語り出づるも鳴呼がましけれど、戰の勝敗は畢竟人にありて、機械にあらず豪膽沈勇は百世を經る共、戰の骨子なりてふ單簡なる教訓の一例として、此處に說き出す短物語を讀み玉ふ可し。

合衆國創業史に、華聖頓フランクリン等の賢士勇將と共に特筆大書せられしジョン、パウル、ジョーンスの名を記憶し玉ふや。彼は蘇格蘭の產にて、貧しき園丁の子なり、十二歲より海の上の人となり、後米國に移住して、獨立戰爭の初より米國海軍に入りたり。而して見るも危き一隻の小軍艦に乘じ、初めて星章旗を太西洋の嵐に吹き靡かして同盟國佛蘭西に來り、佛國水師提督は六十六艘の軍艦を擁して灣內深く潛伏しつゝ徒らに兵法を講ずるに、彼は破れかゝりし老朽軍艦に打乘りて、アルマダ大艦隊の擊沈以來全世界の海上大王と稱し一帆の影も其許可なくては滄海の面を駛する能はずと威張に威張りし英國大小軍艦六百隻を有する英吉利國の沿岸近海を縱橫無盡に乘り廻はし、英國及其殖民地を襲ふこと七回、愛爾蘭蘇格蘭各地の海岸を攻擊焚掠し、敵の軍艦船舶を捕獲し、英人をして恐惶狼狽港々の守備を修め神風の此魔船を吹き去らんことを上天に祈るに到らしめたり。彼は斯の如く合衆國の爲めに萬丈の光焰をあげ、後露佛に客遊して優遇を受け、佛國革命大波瀾の洶湧する前年、四十五歲を以て

佛國に客死せり、彼は生きて合衆國議會滿場一致の感謝と金牌を受け、死して佛國民撰議院の爲めに『自由の爲めに盡瘁したる亞米利加合衆國水師提督』と稱せられ、『勇士の譽は死後に存す、不朽は即ち彼の分なり』と賛せられぬ。

フランクリンが『ポウル、ジョーンス君は常に短兵接戰を愛好せり』と云へる如く、彼の一生は始終冒險の風雲に滿ちたる一生なりき。此處に略説せる所は、實に其風雲の一片なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

米國獨立戰爭の方に闌なりし頃は西曆千七百七十九年八月、合衆國海軍隨一の勇將ハウルジョーンスは、英國沿岸を乘り廻はして大に敵を惱まさむと、老朽軍艦ボン、ホム、リチヤアド號に打乘り、他の二三隻の小軍艦を率ひて、佛國グロイツキスの港を出發せり。抑此勇將を載せたる船は、もと印度航海を務め今は老い朽ちて修繕も爲す能はざる程の敗船なるのみか、載せたる四十門の大砲は大率全きものなく、乘組水兵三百四十人は殆んど全世界の國民を驅り集め來りし雜駁極まる連中にて、海事に疎き百姓も多かりし。此外には折々發狂の癖ある佛將の指揮する一艦と、他に常に戰圏以外に立つを好む一二の小軍艦あるのみ。此雜駁なる小艦隊を以て、海上王の威勢を振ふ英國の沿岸を襲はむこと、危き限なれ共、豪膽なるパウル、ジョーンスは少しも猶豫せず、危を避くる事と味方の妨碍をなす事に尤も巧妙なる同伴の二三軍艦を兎や角引まるめて、行く／＼獲物を收めつゝ、愛蘭蘇格蘭を經て次第に船を英吉利の東岸に進め、秋風ソヨ吹く九月二十三日の正午まさにフラムボロウの岬を廻らむとする時、遙に青海原を見渡せば、雪の如き帆影二つ忽然として海上に湧き出でたり。是れ英國軍艦中錚々の譽あるセラビス號、他の一艦は小軍艦カウンテス、オフ、ス

カルボロウ號なりき。前なるは大砲五十門、精鋭の水兵四百を載せたる新造の大軍艦にして、甲比丹ピーアソン之を指揮す。老朽のボン、ホムリチャアド號を以て之に當る。卵と石の鉢合より危きこと勿論なるも、渾身是膽なる米將は即刻戰鬪準備の令を下し、一直線に敵艦を指して押寄たり。

次第〳〵に敵味方の船は近づきぬ。已に音聲の達する距離に到れば英艦より呌ぶ聲あり「其處に來るは何の船ぞ」。米艦は答へぬ「近ふ寄れ、言ひ聞かさんに」。英艦「何を積んで居るぞ」。米艦「圓彈、榴彈、兩頭彈、澤山に積んで居ます」。問答聲中に船は次第に近寄り、午後七時の頃に到て米艦先づ一齊に舷砲を放ち、英艦之に應じ、須臾に砲聲海に轟ひて、激戰こゝに開けたり。

英艦は如何にもして米艦を誘ふて陸上砲臺の砲撃に遭はせむと謀りたるも、米將は逸早く之を察して敵の計畧に乘らざりき。然るに米艦元來進退思ふに似ぬ敗艦なるが上に、不幸にも敵彈に梶を打損じられ、運轉甚だ困難になりぬ。載せたる大砲は如何に古きものなりけむ、第一一齊射撃を爲すより早く、十九封度砲二門は轟然破裂して、砲手は皆斃れぬ。敵の十八封度彈は恰も米艦の水平線下を洞して、左なきだに水漏り易き老艦は頻りに潮水を吸へり。船は新造なり、砲門は夥多なり、相離れて戰はんには勝は九分九厘まで英艦の手に落ちむ。大幸なる哉、此時敵艦の船頭恰も米艦の船尾の帆檣に突きかゝりぬ。バウル、ジョーンス見るより、大音に航海長を呼んで錨索を持ち來らせ、敵艦の船頭を緊しく我艦の檣に結びつけたり。航海長たま〳〵結び損じて、大に罵る。バウル、ジョーンス笑へて曰へらく、航海長、罵るな、次秒には一同未來に入るとも、今は職分を盡す可きぞと。已にして錨は錨に絡み、帆桁は帆桁に打交り、兩個の軍艦は命を賭し

て相抱きぬ。パウル、ジョーンス欣然大音に叫びぬ、
『出かした、好漢、最早手のものぞ』と。
船と船と結びつけぬ。砲門は砲門と殆んど相觸れ、砲彈を込むるには殆んど敵艦にもたれて之を込む。濛々たる煙の中、凄まじき砲聲、叫聲、罵聲、小銃の響渦まき起り、其間にはしつかりやれ、米奴「眼の用心しろ、英奴」などの聲笑聲と共に起る。

雜録

東京府下の女學校

女子に對する尊敬の多少は、社會文明の程度を示し、道德の清濁を表はす。我か國の地位は今や列國の間に立て毫も遜色なきまでに至りぬ。而して尚ほ女子の地位か非常に低き所以のものは抑も何ぞや。是れ固より女子の罪のみに非ざるべし。然れとも我か國女子の多くは未だ尊敬を受くるに値いせざるなり。女子教育の必要なる今更ためて之を論ずるを要せず。
然るに怪しむべし、數年前左しも喧しかりし女子教育の聲今や関として聞えず、彼等の地位は更らに降下して、一般の女子は無學を恥ちさるにまで至れり。是れ實に慨すべきの至り、其の罪を誰にか歸すべき。
左れど社會は永久までも斯くてあるべき非ず。國家はます〳〵教育ある母と妻とを要じ、世は次第に無學の女子を賤しむに至らんと、想ふに數年を出でさるべし此の時に當て前きに其の子女の教育を怠りしもの恨悔措く能はず、空しく其の不幸の愛女とゝもに臍を嚙むとも。如何んぞ已に及はんや。世の父兄たるもの豈に大いに慮る所なくして可ならんや。
我か社此に見る所あり。地方の父兄のために、東京府下に在る各女學校を紹介して其の參考の便に供せんと欲し、本號より着手することゝなりぬ。

本誌は唯だ大要を記載するに止まれは、若し詳細の事に至りては直ちに其校に問合すを可とす。
紹介の順序の如きは社員訪問の便宜に出でたるものにして別に理由あるに非ず、たゞ本誌の期する處は、各種の女學校を紹介するに在り、故に紹介する者は凡そ各種を代表するに足るもの一二を撰ばんと欲す。

◉明治女學校

◉位置　麹町區山手の脊髓たる下六番町六番地にあり。閑靜にして便利を欠かさるの位置を相し得たりと謂ふ可し。

◉建築　左して人目を驚かす程のものに非ずと雖も、講堂、寄宿舍、其他の組織善く整頓せるもの丶如し。華美ならずして質素なり。

◉主義　基督敎を根底に置きて立ちたるものなり。然れども極めて自由にして、決して生徒の意志を蹂躪するが如きこと有らず。

◉風儀　風儀の正肅なるは此の校の特色といふべし。監督の法もあまりに嚴酷ならずして却つて行き屆きたり。生徒の品行方正なると思想の高きとは、府下女學校中殆んど第一位に在り。

◉歴史　明治十八年本村熊二氏等の創立に係り已でに十一年の星霜を經たり、其の間幾多の盛衰はありしも、此は日本全般の女子敎育と、又基督敎の盛衰とに伴なひしものにして、他に故あるに非ず。卒業生は凡て二百四十餘名にして、現今の在學生徒は五十餘名なり。

◉學課　學課を分ちて二となす。曰く普通科、曰く高等科。

○普通科は中等普通の學術と裁縫、禮式、家政等を授け四年にして卒業す。此科の一年級に入らんには、高等小學三年級卒業以上の資格あるを要す。

○高等科は普通科を卒業したるものを入れ、專ら和、漢、英の文學を授け、四年にして卒業す。現時用ひつゝある敎科書を擧ぐれば、英文學に、

ジョンソンのラセラス傳。スコットのタリスマン及び湖上美人。ホーソンのスカーレット、レツター。アービングのスケツチ、ブック。セークスピーアの戯曲。スウヰントンの英文學。スペンサーの教育論及び作文、修辭

あり。和文に、

枕草紙、源氏物語、紫式部日記、謠曲集、萬葉集

あり。漢文に、
論語、古文眞寶、左傳、杜詩、莊子、
あり。

此の二正科の外別に撰科、專修科の設ありて、正科に入る能はざるもの丶便の計れり。

○○○專修科には英學(月謝金壹圓)國文(同半圓)裁縫(同上)繪畫(同上)女禮(同上)武道(同三十錢)及び音樂の分科あり。而して音樂の內に又琴(月謝三十錢)オルガン(同一圓)及ヴァイオリン(同上)の別ありて、之を專修せしめ又兼修をも許す、

◎經費　入學の時は二圓の束修金を要し、月謝は專修科を除くの外一圓二十錢なり。寄宿するものは三圓の塾費と八十錢の雜費を要す。故に一ヶ月七圓內外の資あらば、不便なく留學するを得。

別に特志のものに限り月謝を貸與するとあり。斯る生徒は或は講師の家に書記となり、或は校舍の務を爲して衣食の道を力め居れり。

校長及び敎師　校長は嚴本善治氏にして、敎師には本邦人十九人、外人二人あり。

嵯峨野の露

(口繪の詳解き)

小松内大臣重盛に仕へし齋藤瀧口時頼てふ侍あり、横笛と呼ばれし婦人と結婚の約束をなしたりしも、父許さずして之を追ひければ、則ち遁世して洛西嵯峨の往生院に在りしを、横笛聞て之を尋ねしこと平家物語に見ゆ。

比は二月十日餘の事なれば、梅津の里の春風に、よその匂ひもなづかしく、大井川の月影も霞にこめて朧なり。一方ならぬあはれさも、誰故とこそ思ひけめ。往生院とは聞きつれども、さだかにいづれの坊とも知らざれば、こゝにやすらひ彼處に彳み、尋ねかぬるぞ無殘なる。

住み荒したる僧坊に、念珠しけるを、瀧口入道が聲と聞きすまして、「御樣の變りておはすらんをも、見もし見え參らせんがために、妾こそ是まで參りて候へ」と、具したる女にいはせければ、瀧口入道胸打騒ぎ、あさましさに、障子の隙より覗きて見れば、裙

は露、袖は涙に打しほれつゝ、少し面瘦せたる顔ばせ、誠に尋ねかねたる有樣、如何なる大道心者も心弱くなりぬべし。

瀧口入道人を出して、全くこゝにはさる人なし、若し門違ひにてもや候ふらん、といはせたりければ、横笛なさけなく怨めしけれども、力及ばず、涙をおさへて歸りけり。

斯くて瀧口は再び彼女の尋ね來ることもあらば、心の動くこともあらんとて高野山に往きぬ。

後横笛がさまをかへたるよし聞きて、

　剃るまではうらみしかどもあづさ弓
　　まことの道に入るぞうれしき。

横笛返事、

　剃るとても何をうらみん梓弓
　　引きとゞむべき心ならねば。

斯くて横笛は奈良の法花寺にて果敢なくなり、瀧口は愈々行ひすまし居ければ、父も不興を許しけり。親しきものども彼を高野の聖といひしとなん。

時事一斑

井上子と西園寺侯

井上子の教育は、官吏的教育を人民的にし、浮誇的教育を實用的にしたるものなりき。而して子は必ず其實行を期し、一斑は已に其緒に就きたり。

西園寺侯の教育は、更らに加ふに啻に國民的教育のみに止まらずして、幷せて世界的教育をもなさんとするもの丶如し。吾人は侯の井上子の如くに、必ず其實行を期せんことを望まざるを得ず。

工業教育

今後の日本は只管に富の膨脹を謀らざるべからず、從て、大に實業の盛大を企圖せざるべからざる時となれり。中にも日本の國柄として工業若くは商業は非常に發達せしめねばならぬこと必然の勢たり。

今や工業教育の教育界に最も重きを置かるゝに至らんとするも、蓋し偶然にあらずと謂ふべし。

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　秀英舍印行

明治廿五年九月十四日遞信省認可

復刻版 家庭雑誌 第1回配本（第1～5巻）

1986年10月25日 発行

定価 90,000円

発行者 船橋 治

発行所 不二出版(株)
東京都文京区本郷5-28-3
〒113 ☎03(812)4433

印刷所 ワールド印刷

製本所 吉田製本工房